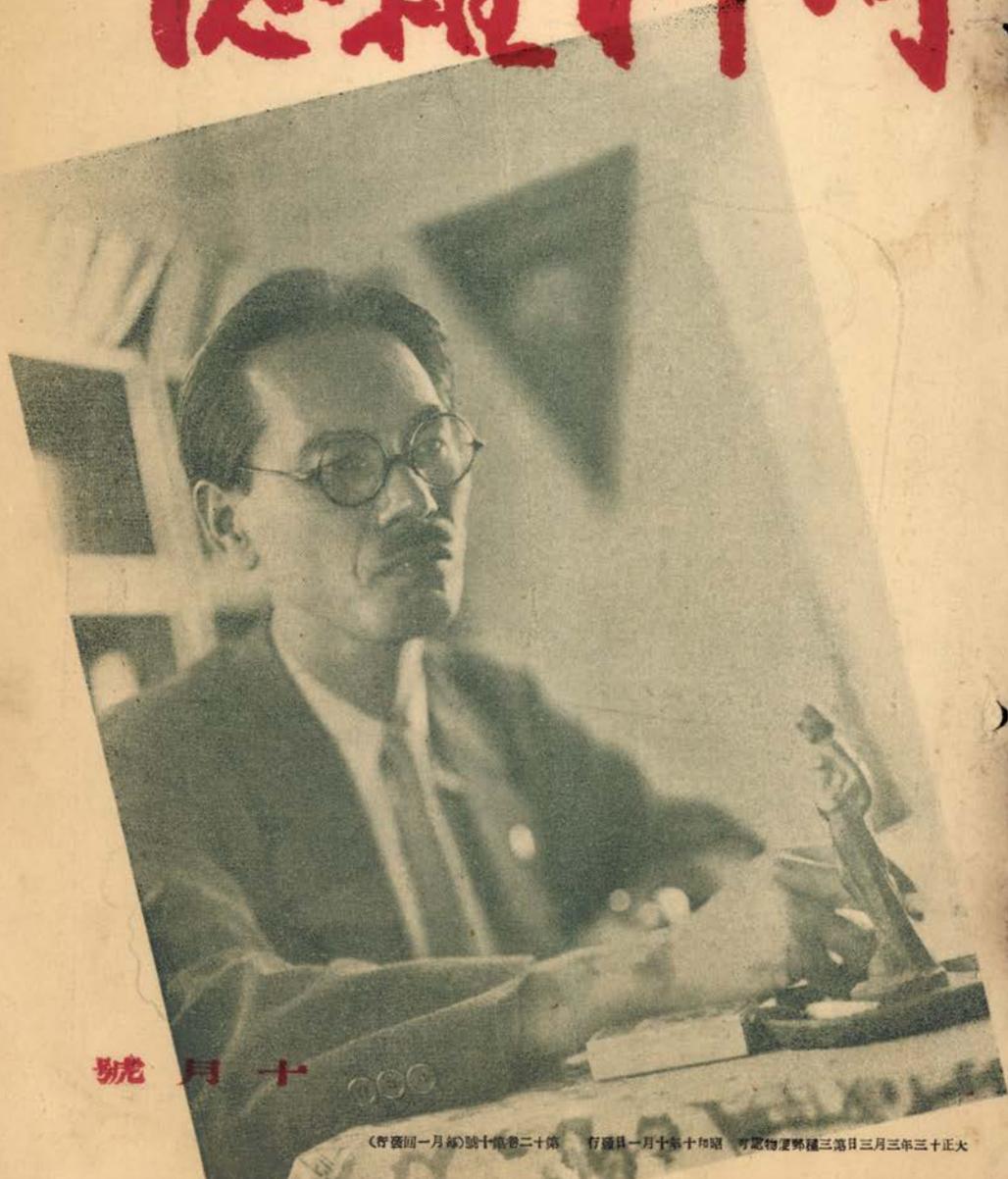


麻生路郎主宰

川柳新誌



第十號

大正三十三年三月三日 星期三 零售每份五錢 訂閱每月一元 郵費在內 總發行所 東京市丸の内區千代田 丸の内郵便局 電話 二二二〇

一家一ノ瓶 是非必至!

皮膚障害・外用薬

仁丹の靈泉

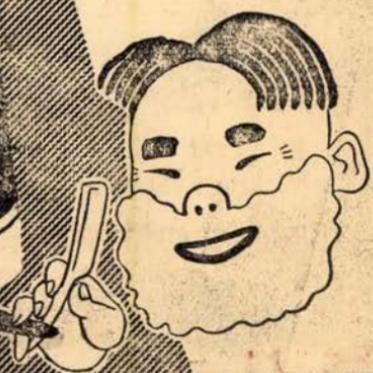
○ 全国到る處の藥店にて販賣す



本劑の主治能

- 蚊ずれ 癢そりマケ
- たされ 手足あれ
- 切り傷 吹出もの
- 打り傷 吹きき
- やけど あせも
- 水虫 虫
- ちぢみ じん
- たむし 蚊・蚊・ふと

○ スポーツの外傷に殊効!



所業堂博下森・舖本丹仁薬中徳

本邦最大の生命保険社會

我社は不拔の基礎の
上に立ち、百十餘萬
御加入者の絶対信賴
の下に不斷の躍進を
續けて居ります。

日本生命

大阪東區今橋四丁目



川柳雜誌第十二卷第十號目次

文苑

僕の手帖……………麻生路郎(四)

二つの抗議……………福田山雨樓(六)

武玉川二篇研究(十八)……………梅本秋の屋(三〇)
森東魚(三〇)
蛭子省二(三〇)

明治以後の川柳年表(八)……………西島〇丸(三四)

川柳指導講座(四)……………川上三太郎(三一)

評街の高臺……………路郎、丹路、雨迷、艸樂、春秋、汀柳(三八)

北濠莊窓話……………山本雨迷(三五)

秋のこぼば……………山本丹路(三七)

當世不通漫談(主)……………梅本塵山(四〇)

四國遍路(五)……………酒井大樓(四八)

連想川柳習作之夕……………豆史汀與(一九)

川柳二十日會……………春光、汀與三郎(五三)



桑山清美君を悼む……………翠夢、みつる、勇…(五)
 天保山より高坂城まで……………竹内機見女…(四)

ア・ラ・カルテ

球の威力……………姫田夕鐘…(五)
 青樓戯譚よしだ・すいしや…(五)
 川柳のたね③……………青木史呂…(五)
 美と川柳……………三嶋美笑…(五)
 満月にそむく……………平井春光…(五)

創作

近作柳樽……………麻生路郎選…(六)

川柳塔……………麻生路郎選…(四)

粒々集……………長崎柳秀…(三)

一路集 火鉢……………姫田夕鐘女共選…(四)

寺……………福田山雨樓選…(五)

各地柳壇……………路郎、艸樂、汀柳選…(五)

柳界展望……………(六)

編輯の窓……………汀柳…(六)
 川柳家戸籍調……………緑雨…(五)
 表紙寫眞……………編輯室の路郎主幹……………表紙題字……………楡重……………
 本社關係の人々……………本社句會案内……………
 (七) (六五)



僕の手帖

「川柳の夕」の放送に就て

BKから放送を頼まれた。BK案で生れた放送だけに、AK・BK・CKの人選に就ても相談にあづかった。水府君と僕とで人選をした。二人の意見が合致したので、それが大體に於て實現するものと考へてゐたが、BK案はAKで美事に打ち毀はされた。計畫に携はつたBKの人を憂鬱にさせた位に歪められてしまつ

た。最初の案がその儘通過したのは私一人だつた。他は持場を變へられたり、オミツトされたりした。水府君の役割も選句披講の豫定ではあつたが、それもアナウンサーの披講となつてしまつた。課題も「秋雜」であつた。もつと川柳らしい題を選む必要が無いかと案じてゐたが果して結果は面白くなかつた。それは兎に角として人選の仕方が殆んどなつてゐなかつた。全く柳界の消息を知らぬ人の選み方で、内科醫が外科醫の仕事させられてゐるやうな、危ぶなつかしいものだつた。選まれた人々の多くは筆者の親しい人であり誰がいゝとか悪いとか云つてゐるのではないが、醫者でさへあれば學究であらうと臨床家であらうと見境ひなく手を握らせてゐるやうでは滑稽でしかないと思ふ。この點放送當局のためにも日本柳壇のためにも折角の催を臺なしにしてしまつた憾みがないでもない。

久良伎氏の「初代川柳の話」は無難であらうと思つてゐたら、「初代川柳の話」でなくて「川柳私観」と云つたやうな話であつたのには驚かされた。氏の若々しい聲と、その熱には敬服するが、全く題目から離れて日本精神の一本槍には失望した。長老としての鼎の輕重をとほはしないかを疑つた。それに選句までされた勇敢さには驚いた。選句は第一線に立つてゐる人に譲るべきではあるまいか。關西からは私自身が講演をしてゐるので、斯うして久良伎氏の講演に兎角の

言を爲すことは差控へたいのであるが、道のためには面を侵して一言したいのである。

私は放送室の机に向つてA Kからの氏の講演を聴いてゐた。氏の講演が終ると直ちに、私がB Kから講演を續けることになつてゐたからである。私は氏の講演を聴いてゐるうちに、あまりに高踏的であり、しかも題目を外れての話であつたので、これは大變だと思つた。私もいさゝか川柳の本質を述べるつもりであつたが、急に方針を變へて、本質を頗る簡単に話して、多くの例句を掲げ、それによつて川柳の一端を知つて貰ふことにした。それは時間の少ないのに原因した。私の演題は「川柳の笑いと涙」であつた。

私は自分の講演が済むと、さつさとB Kから引あげた。そして當夜日本橋俱樂部で催されてゐた我が社主催の柳翁忌にのぞまなければならなかつたし、そこでも私は何か談さなければならなかつたので、ゆつくり選句披露を聴く時間を持たなかつた。

しかし、川柳會場にラヂオの設備を急設してあつたので、一部分の披露は聴いた。遺憾なことには名句は稀だつた。これは選者の罪か作句者の罪かは又放送當局の罪か。私が明言するにも及ぶまい。兎に角九月の柳翁忌に際して「川柳の夕」を企てられたことには満腔の敬意を表する私ではあるが、今後のプロ編成を思ふて東京の放送局に次の苦言を呈して置きたい。

人選は官僚的であつてはいけない。それに誰に何を

やらせるかを第一に考へなければならぬ。あるものを放送する場合には、その道の人についてよく聴く度量が欲しい。放送委員は神様ではない。知つたかふりをしてはいけない。今回の放送に際しても、東京三、大阪二、名古屋一、所謂五、三、一の比率で人選をしてゐるが軍縮ではあるまいし、冗談ではない。眞に名古屋に人があれば二にしても三にしてもいいであらうし、適才がなければ無理に一を選む必要はなからう。これも各放送局の加入者數の比率に據るとの辯護が出るかも知れぬが、それは全くいはれない事である。

川柳三越展の一瞥

自分は九月の十日から病臥してゐたので「川柳三越展」はギリ／＼の日の十四日、それも午後四時頃に觀に行つた。これは觀に行くと言ふよりも番傘川柳社の努力に敬意を表しに行つたのである。従つて私はこの展覽會に對する批評らしい批評は書けないが、第一に氣附づいたことは、川柳の歴史が浅いために、人形を配したり、各地の名物を蒐めたり、手拭を並べたり、何れも、川柳そのものと云ふよりも他の物を借りてお茶を濁してゐるように思はれて、その點多少ひげ目を感ぜさせられた。しかし、さうしたもので兎に角お茶を濁し得た手際は番傘ならではおそらくやれまい。

次に文獻の少ない川柳に、相當に文獻を蒐めてゐた同人の苦心は買つていゝ。

— 麻生路郎 —



近作採稿

路郎選

角一ゴム争議に直面して

蛇一つ争議の門へ飛んで入り
 労働歌暑い夜空を濁すのみ
 代表の机たゞけは蠅がとび
 争議團おとなしいのが月をほめ
 稻荷さんへ争議の石の罰當り
 逢曳は霧にうるんだ灯につかれ
 人生の黄昏停年近き椅子
 貝殻も石も渚でまくるなり
 見よ煙は不平を言はず空衝けり
 煙突はならび私語することもなし
 機械の音が女等を唾にした
 食つて寝るだけの我家となりになり

大阪

大門

同

徳三

長野

有為郎

大阪

利生



電車バスやつと間に合ふ出勤簿
 一萬圓怪盜

大盗のあつけなかりしザ・エンド
 濡れてきて慈雨と氣の付くほがらかさ

自信をためず賭となりけり
 形式のある遺書と下駄ならべられ

爪弾の女家守をしてるなり
 宿題のまだかたづけかぬせみとんぼ

日覆ハタ 撒水車が通る
 道しるべ町に這入つて見失ひ

指定席僕の隣りは空いてゐる
 末席で知つてるだけを歌はされ

父眠る土軟らかし蔓珠沙華
 本心を聴きたい猪口へ蚊が一ツ

名物と言ふ蚊に晝も落ちつけず
 仲買ひに桃は三つ四つ喰はれたり

建築用地一年は無駄にすぎ
 行水でサンタルチャがよく響き

張ヶ池

大阪

神戸

大阪

今治

大阪

同

同

一更

同

同

天国

同

同

天風子

同

同

世間音

同

一風

同

花鳥

同



ちりめん十三の兵兒帶故郷の父來る
柔道衣脱ぎ常ど勝んの顔太郎となり
取引所勝すらり自轉車灼けて太郎ゐる
ぶろれたりあてふ淋しきほこり勝かな
我が智慧の様に受賣りして太郎るなり
何んだ君だつたのかと眞裸
病室の天井は白しかぶと虫
朝焼に氣付けば蟬も鳴いてゐる

宵明令妹早逝

兄の達筆で會葬御禮
一人旅湧き出る雲の彼方まで
傀儡の様に土藏とゐる長男
輸血の室に振子が呼吸をするばかり
床の間へ登山用具は並べられ
病人が笑ふ一家へ秋が來る
待たす程まだ修養が出來てゐず
遠慮なく装うてゐて氣を使ひ
夜逃した家アンテナが風に鳴る

十三

勝

勝

勝

勝

勝

勝

勝

勝

牧人

勝太郎

芳泉

浮鬼

曉童

笑鬼

翠峯

葉光

小樓



あの窓と思ふ窓の灯みてゐたり
 夏雲や癒へぬ私の瞎をうばふ
 退屈が僕を妄想狂にした
 善人のすぐ顔色をみてとられ
 自尊心ダイヤの指を見まいとし
 マダム今日ヒスカ皮肉がきつすぎる
 改札を出て別々な道を行く
 リユツクサツク山の氣象を頼るなり
 ターキーを取り巻いてゐるサイン攻め
 感傷のやりば港の灯がまばら
 ノーハット金に苦勞がたゑぬなり
 双眼鏡のレンズを塞ぐ女の手
 晝のバーねくたい赤き男ゐる
 寝不足の欠伸かくした舞扇
 蠅は手をコスリ女給は馬鹿話
 水鉄砲養ての親によくなつき
 水玩具たらひに浮び子は晝寝
 夜は長し何の泪ぞ羽根布團

松江

同 讓 二

八幡

同 十七 八

松江

同 圭之介

東京

同 肖 五

松江

同 比呂志

名古屋

同 蕪 人

四宮

同 三代吉

伊豫

同 富美女

大阪

同 沐 天

大阪

同 沐 天



當選の後は野となたれ山となれ
 外交員あまりに早稻田風負なり
 エニホーム揃つて店の朝早し
 空いたのが来たと思へば故障なり
 物干のトマトは莖がのびたゞけ
 顔負けのする洋装ですり寄られ
 洋装のつんとしてゐる待合所
 金持にされて苦しい名譽職
 海で會ふ戀八月の陽は眞上
 友情も酔ふた介抱とは淋し
 石投げてかなはぬ戀と諦める
 あきないに慣れたは嘘に慣れた事
 腕で喰ふ女の足の活潑な
 笑顔までずるく出来てるなと思ひ
 著へもないに停年期がせまり
 水銀はぐんぐん昇る蟬は鳴く
 末っ娘のネエネエにまた買はされる
 我無口自分ながらも淋しくて

東京

大阪

今治

神戸

松江

今治

廣島

盛ヶ池

大阪

同
四塊

同
彩泡

同
伶人

同
九葉

同
登美也

同
文庫

同
春帆

同
善朗

同
寒草



中之島下手なオールの水に濡れ
 發起者の一人武骨に墨をすり
 上役の皮肉扇子に風があり
 今日明日を財布の中で思案する
 養子とは金を使つてけりがつき
 更生をするぞと髪を刈つてくる
 木魚叩いて和尚の疑心
 ネクタイをどれと替へよう秋近し
 米の値も知らず小遣不足勝
 又噂されて腹立つ女戸主
 久濶の友の訪づれ胡瓜もみ
 道連れが出来てはしやぐ出雲札
 蔑みの笑ひも知らず嬉しがり
 歸らない母子を知つてゐる玩具
 交番へ金を落した頭下げ
 打ちあける娘に父は苦り切り
 五寸程大きくなつた衣更
 葛饅頭いたゞく爲に薄茶飲み

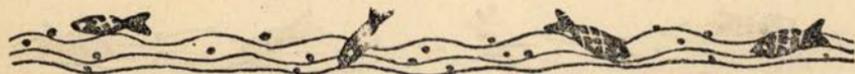
神戶 大阪 今治 大阪 石川 名古屋 大阪 名古屋 東京 松江 東京 大阪 東京 大阪 兵庫 高松

同 久米雄 同 節子 紫陽 玉葉 水樓 龍鳳 千舟 崙喜固藪 不二號 一平 非常兒 千春 無鐵砲 麥酒 靜波 柳夢



灸跡へ嚴格なりし亡母憶ふ
 泳法を笑ふ老父の胸の巾
 落ぶれた師匠が目立つ裏長家
 パトロンの野心箴にほぐれかけ
 よくできた玩具大人が面白し
 つけ睫毛洗ひ落してひとりぼち
 泣く兒を抱きて喘ぐ星の夜
 唇の玉虫色にある魅力
 盲目の愛か知らねど子の弱さ
 鹹首になる心配もなし定期買ふ
 ルンペンに入れ齒の金に氣がついて
 まだためる氣へ五十錢の貯金帳
 この歳で世に云ふ運が向いてこず
 谷の川烏と同じ水を飲み
 負けぬ氣を眉一ばいに墨を引き
 感情のもつれ盃見据えられ
 いつか物頼まれそうに親しまれ
 雨をサボれば妻に敷のし頼まれる

大	金	兵	大	今	神	大	東	高	大	廣	島	松	大	京	大	神	大	大
阪	澤	庫	阪	治	戸	阪	京	知	阪	島	根	江	阪	都	阪	戸	阪	阪
梢	柳	破	逸	輝	朝	美	佐	水	緩	都	好	葦	歌	狸	仁	木	住	
雨	之	助	鼓	園	親	代	保	魚	勾	子	郎	美	都	公	昭	履	雄	



曲射砲雨の高さを射る如く
 なにもない氣易さ雨戸開けて寝る
 金持の養子近所へ世辭がよし
 街に来て女と酒を知つただけ
 子にも珠數持たせて大師詣りなり
 醉覺めて妻にすまないことばかり
 汚れてる敷布に慾もなく眠り
 村の晝樂隊ギョウギョウしく通り
 瓜一ツ母に似てくる女の子
 二錢出す手に無言の赤新聞
 虫を友として尺八に凝つて居る
 朝霧へ娘心は浮いてゐる
 孝養がしたく戻つた田圃道
 打てば鳴る小さいながらも鐵のくづ
 君も又涼みがてらの信心か
 聊かに義憤を感じ損をする
 趣味を持ち自己満足の續く頃
 孝行な姉妹平和な村に住み

松江 柳大佐
 竹原 馬占山
 大阪 つと夢
 神戸 獨歩
 大阪 靜霞
 伊豫 京司
 大阪 寛水
 愛媛 白羽
 柏原 公子
 大阪 哲平
 神戸 吉左
 藤川 樗柿
 今治 藤生
 大阪 新市街
 伯耆 秀峰
 京都 丁路
 大阪 都會人
 高知 柳香



雨、雨、雨、暗い心にしてしまひ

老父を神戸港へ送つて

見送れば甲板の父に皺がふへ

俄雨女房叱つてぬれて居る

酒よジャズよ俺の心にふれてくれ

バツト品切の店からの散歩

警官へ女給は客の唄を詫び

探し物二三度開けたところから出

戀もなく母と暮して日廻草

上役は考へて置かうとその場切り

友の訃に箸を落した朝の膳

家賃の次に南京虫をき

紅切れし日のお化粧は淋しゆうて

汗を拭き拭き押ししてゐる遅刻印

肩車の子が云ふがまゝ汗をかき

酒、煙草捨て朗かさを忘れ

末の子が百打つ肩に褒美が出

泳げない同志は碁でも打ちませう

松江 月山

尼崎 翠陽

松山 靈子

貝塚 雨舟

大阪 いさむ

尼崎 觀月

高知 星水

大阪 水客

同 品子

奈良 葉魚

大阪 彩泡

京都 白英

大阪 菊路

松江 ワツパ

神戸 蘇堂

藤川 章泉

東京 樂天坊



一二つの抗議

福田山雨樓

三太郎氏が「きやり」九月號「初歩添削講座」へ「馬」講評——の序説として述べられたあの文章を仔細に繰返して見ると、そこに柳樽蔑視の氣持が潜在しており、明かに柳樽輕視の一失が指摘されるのである。「僕には古川柳の多くは退屈の標本である。」とは同氏の偽らぬ告白であらう。だから誹諷柳多留は川柳のバイブル——といふ崇拜的、尊稱的な讃辭をも、皮肉に「誰かゞ誹諷柳多留を川柳の聖書であるとはよく言つた。全くその退屈な點に於て僕には「西にバイブル、東にヤナギダル」である。と諧謔し得るのである。同氏がその裏發的眞實さにおいて古川柳を退屈視し乍ら「但しこれはいけない事だ。恥かしい事だ。何うかしてこの惡黨みたいな根性を直さなければならぬ——と始終思つてゐる僕である。」と自らを戒めてゐられるのは「初歩添削講座」に於ては大切な言葉であつても、僕にはほんとうに頭を下げた反省ではないうやうに思はれる。

因來三太郎氏には古川柳を禮讀し讚美した文章が甚だ妙い。殆

んどないと思つても過言ではない程見當らない。古川柳賞揚の言葉が見當らないと同時に、進んで古川柳をこきおろした文章を餘り見聞しなかつたやうである。然るに今回「きやり」誌上の「古川柳退屈觀」は、從來の消極的態度を更め、敢然その旗幟を表明されたものであつて、川柳家として輕々に看過し難いものがある。

「古川柳の馬」に就て示された十一句中には、柳人に親炙されてゐる「煮うり屋の柱は馬に喰はれけり」もないし、同氏の著書「川柳滑稽句集」古川柳篇に掲げられた馬の句で、右十一句以外に十四句あるが、それも顧られてゐない。しかもその中には「面ざしは馬に似てゐるきりぎりす」の如き名吟があり、この句に付ては「大正川柳」大正十一年六月號に執筆された「川柳の内容と表現に就いて（それから佛蘭西の俳諧詩の話）」の中に引例されてゐるのである。更に同氏は「きやり」昭和六年一月號に執筆された「川柳よ、お前は何處へ行く」の中に「標足が背中まである馬の首」と云ふ古川柳を例示してゐるのである。古川柳の馬の句は拾へば澤山ある。本誌に連載された「武玉川初篇研究」の中にも八句ほどある。斯ういふ句が何れも逸せられてゐて、同氏の記憶に甦らなかつたと云ふことは同氏の古川柳輕視でなくて何であらう。

けれども僕はそんな執筆上の手落ちや、句の忘却について責めるのが本意ではない。元來三太郎氏には古川柳を怖れ、驚かないだけの作家的裏發が惠まれており、名匠と稱せらるゝ作家であるから、そんなものを無視し馬鹿にしてかゝつてもいゝだけの腕と自信があるに相違ない。だから同氏にして見れば古川柳の洗禮を受けない、純無垢の川柳家たることを寧ろ光榮とし誇りをすら思

つて居らるゝかも知れない。現に同氏は十二歳の少年の頃、岡田三面子選の「懸賞狂句」に入選した事を「川柳俳馬」誌上で述懐してゐられるが、全く先天的な生えぬきのセンリュストであつたのである。斯く三太郎氏は生れつきの川柳家であるが、それだからと云つて古川柳が嫌ひでゐてそれで済むか、古川柳を輕視してもいゝのか、問題は此處にあるのである。

路郎先生はかつて「川柳雜誌」の句會席上で武玉川の研究について（當夜は森東魚氏から武玉川に關する講演があつた）……「新しい句を研究し創作するものにとつて、武玉川の研究を重要視する事は、その新らしさを一層徹底せしむる所以である。古句を究めてこそ眞の自信ある新らしさをつかみ得るのだ」と云ふ意味の話をされた事があるが、古川柳研究の重要さ、緊要さは川柳家のあらゆる階級層を通じて認識されねばならぬ。

歌壇に於ける萬葉、俳壇に於ける蕉風の研究が目を追ふて盛大を極めてゐるのは何を物語るものであるか、川柳家の以つて他山の石となすべき事柄であらう。

柳壇の國寶的存在たる三太郎氏にして今頃古川柳は退屈の標本などと。白眼視せらるゝは甚だ遺憾に堪えぬ次第である。よろしく氏の蘊蓄を傾倒せられて、古川柳の再發掘を試みられんことを望む。そして「川柳研究」昭和九年三月號「蒼々亭から」中に述べられた「古句は再吟味しなくてはならぬ。從來と違つた角度で見直さなくてはならぬ。これは二、三年以前から僕が言つてゐる事だ。そうして僕等はその先驅になりたいと思つてゐる。森君の別掲の原稿はその意味に於て先驅をなすものである。僕もこれを契

機に二三の同意を得て實行する心算である。」の言葉を是非實踐されん事を切に祈るものである。

二

「芥子粒」八月號は「連作批判特輯號」として、鶴太郎、琴人、町二、天邪鬼諸氏の評論感想を載せた。時宜に適した編輯だと思つたが、連作を試みてゐない川柳家の意見と、連句連作に對する一家見を有する東都川柳家の意見を聞いてほしかつた。雀郎氏の高説は第一番にほしいものだつた。

それは兎に角として右の評論中町二氏の一文には聊か物を申したいと思ふ。それと云ふのも彼氏の論題「連作支持」に關ふ論旨に附けたして、連作反對論者の反對論が述べられてあり、それが常に僕の言つてゐる言葉と似てゐるので、妙からず僕の關心をそゝつたからである。或は僕を假裝論敵として書いたのであるかも知れない。そして僕は彼氏の巧妙なる誘導訊問に引つ掛つたのかも知れない。それにしたつて構はない。僕は所信を引つ提げ敢然として論駁するであらう。

しかし生憎なことには僕は連作川柳反對論者といふほど強硬な反論を唱へるものではない。況んや「連作をする位なら川柳をやめて、短歌にでも長詩にでも勝手に走れ」などとはいはない。この連作に對する意見はしばらく預りとして、問題は自由律川柳に對してである。「手」九月號で示してゐる。

朝から流れつゞけてゐる汗で拭かうともしない 町二
のやうな句を自由律川柳だと稱して、譲らぬのならば、それはしかし本質的に川柳から逸脱した他の詩の部類に踏み込んでゐるも

ので川柳とは認め難いから、潔く他の名稱を用ひられたらどうか、と懇願してゐる譯である。この句が何故川柳本質から離れてゐるかと言へば、制約された川柳の詩的精神を持たないと認むるからである。制約された川柳の詩的精神とは即ち川柳味を指稱するのであつて、この川柳味こそは町二氏と僕が年來係争してゐる詩的ギャツプであるから、この點を説明しない限りお互ひの議論は端しがつけないのであるが、之れが詳論を遂げることは眞が許さないので、何か他日稿を更めて論ずることとする。尤も僕と町二氏の間柄では、僕の川柳味なるものが相當理解されてゐることと思ふから、自由律の作品を川柳の域外において貰ひたい、と云ふ要求もわかつてゐるようなものであるが、事實仲々その諦めが付かないらしい。それでこの事を餘程氣に病んでゐるものと見えて、「芥子粒」八月號では「馬鹿々々しい理窟」だとか「頭の悪い傳統精神」とか云ふ聊か亂暴な言葉で片付けてあるが、いつもの町二氏に似合はぬあつて方である。

も一つ始末の悪いことは、町二氏は最近柳俳無差別を消極的に主張しており

あたり灰いろの塀や木や夾竹桃咲けり 町二

といふやうな句を發表してゐるのである。此處迄句に理論に徹底してくれば、これが應酬に仲々骨が折れる次第だ。

さて論點に立戻つて、町二氏の誤謬を正さねばならぬ事は、兄等の云ふ自由律川柳は、川柳でないから、他の名稱(例へば同氏がかつて「手」で述べた短句などはその適例である)を用ひたらどうか、と云ふのは、兄等の云ふ自由律川柳そのものを止せ、と云ふこととは違ふことである。兄等が信ずる道を進むのならば自由律であらうと、柳俳無差別であらうと、新興連作俳句であらうと、それは兄等の勝手であり自由である。しかしそれ等のものに對して川柳と云ふ名を冠することだけは捨て、貰ひたいと云ふのである。これは「世の中がいやになれば自殺してしまへばい」と云ふのととはわけが違ふ。「川柳雜誌」と云ふ看板で結社するのがいやなれ

ば、「手」と云ふ看板で結社しなさい、と云ふ事程容易なそして好きな選び方なのである。それ程容易な注文が何故あつさり出来ないのでか。

次に町二氏は碧梧桐の「明治俳壇の追憶」の一節を引用して、かつて僕が「碧先生はかつて三昧誌上で、和歌俳句の形式を排撃された後で(中略)頗る徹底した意見を示されたが、遂には自らの句に對して俳句と云ふ文字を使はれない様になり、今春には俳壇の第一線から隱退をすら聲明されるに至つた」と述べた事に一矢を酬ひやうとしてゐるが、如何に詩のレベルを以て誤辯されても、自由律の破綻から隱退を餘儀なくされた、ことは事實である。しかし碧師の隱退に對しては衷心遺憾とするもので、爾餘の論議は遠慮するが、最後に町二氏が結論としてあげた、「詩の圏外にも價せぬかうした川柳味を徹底的に排除することに先づ努むべきではなからうかに對しては僕は矢面に立つて論戦しなくてはならぬ。一體詩の圏外とか、詩のレベルとかは何を基準として云ひ得らるのであるか。之は甚だ六ヶ敷問題なのである。試みに一句を拉してこれを組上に句評した場合、論者が忠實なればなるほど、その詩的鑑賞は仲々容易な業ではないのである。それも取るに足らない平凡、幼稚な句ならば問題はないが、相當練られた句については甲論乙駁さう簡単に定められるものではない。又句を一讀してこれは理窟、これは俗情、これは誇張などと大まかに撰別しその短所だけを見て長所をとらないことは、忠實な句評と云ふことは出来ない。斯く川柳家として相當至難な句的價値の問題を、至極大ざつばに「理窟や俗情や誇張は、川柳に拾はれ川柳に培はれて、當代川柳の中に氾濫してゐる」など、嘯くことは、言甚だ壯快であるが、皮相の觀に過ぎぬ。それで己一人高く止まつて居やうとする町二氏でないことは、僕の信じて疑はぬところであるが、三太郎氏が古川柳を輕視し、今又町二氏が現代川柳を侮蔑せんとするの言葉に接し、鬱殺たる公憤を禁し得ない。

川柳連想習作之夕

豆 史 汀 與

大菩薩峠の米友に浴衣を着せ
たやうな恰好で、道頓堀をのし
てみると、鼻の先へクローズ、
アツプされた顔、顔、顔。汀柳
さんと、史呂、與三郎の兩君、
それから「道頓堀肩を叩くと連
れになり」の句の通りに「まん
朝」の二階へ……(豆秋)

凡そ小料理屋なるものは御酒
を戴く處でして、御多分に洩れ
ず「まん朝」の二階だつて型通り
お酒が運ばれるのに何の不思議
もありません、誰やらが「なあ
チロリこれから秋に親しまう」
と先生の名句を口詠みまじ、
チャブ豪を圍んで話題は川柳以
外にないです、汀柳氏の提案で
「エ、今夕は川柳の夕を催し
ます」(史呂)

二階の床の間にはわれらの師
の名作
名をすて、十七八の戀もせむ
路郎
がこゝの四人を見まもつて下さ

る、日毎夜毎幾多の戀の囁きの
殿堂となつてゐるこの部屋も、
今日ばかりはいとも靜かに、け
なげにもゆかしき心意氣の男た
ちによつて連想川柳を作らうと
云ふのである、盃は暫しおあづ
けのかたち……(汀柳)

作句も終つたので、卓上のペ
ルを押すと龍頭のヒヤリとして
秋にふれた思ひがする。河豚も
もう出る頃だと思ひ乍ら玉子豆
腐に、秋の杯を嘗める四人、陶
然とした階段を下りると、看板
になつた女給と若い男が入口を
塞いで密語いてゐる酔ふた四人
異口同音に「其處豆史汀與」
△原 句
老眼と知りそめし目を宮仕へ
(路郎)

△連想句
大禮服妻の白髪をいたわりて
型ばかり銀婚といふ祝膳 (與)
鯛はなくとも心からなる祝膳 (汀)
(史)

晩酌を一本ふやす誕生日
初誕生思へば淋しき夫婦膳 (豆)
突然に歸れば襦袢洗つてた
ムツキ、今日も朝から雨が
降り (史)

△原 句
葉雞頭畫の枕を胸へあて
(路郎)

△連想句
深みゆく秋を感じて庭にゐる
煙草に火つけて秋の庭へ下り
こほろぎは生れるとすぐうた
ひ出し
本能の捨て場城壁めぐり立ち
驢鹿へ萬里の長城呆ツ氣なし
満洲へ来てサーカスは解散し
解散へ無産闘士の目がくらみ
強く強くプロレタリアと云ひ
歩るき
女給です所詮は弱い女です
アパートを借りる女給に野心
ありネオンの灯消えて女給の背に
落ちる
子を寝かしネオンの動くとこ
へ行き

赤心一票やどころなし
△連想句 (路郎)
忙がしき白濱へいて晝寝する
晝寝から覺めると待つてるパ
ツカドら
自家用車裁判所へも行きは行
き
執達吏になれとは親は云はね
ども
因縁と思ふ巡查の忘れなり
肅正に元の署長も引つ張られ
元を糺せば源家の血もながれ
平家蟹買ふて歸つて叱られる
叱られて出ると入道雲動き
まほろしの戀消えて行く雲の
ごと
十六の戀を詩などにたとへ
見
戀秘めて下宿の壁の選舉ピラ
△原 句
人妻となつて卓怯な眼をつか
ひ
△連想句 (路郎)
借金の斷り慣れて妻の愚痴
愚痴を言ふうしろ姿も淋しま
れ
呼び掛けて振返られて人違ひ
(史)



武玉川二篇研究 (一八)

梅 本 秋 の 屋
 森 東 魚
 蛭 子 省 二

(502) 湯治からひよつと氣のつく内普請

省 二 保養に來て居るのだから風景を愛でたり、普請を賞めたりして日を過す。そのうちに不圖氣がついて内普請がしたくなり、素人の設計圖を描いてみたりする。

秋の屋 小人の閑居ならば、不善をなすのであるが、これは有産階級の閑人で、茶室の普請などを目論むのである
 東 魚 「内普請」は私宅の普請の意であらう。(内部の造作と云ふ意ではなからう)

(503) 法印の早合點で闇になり

省 二 法印は僧位か醫者か。いづれにしても早合點の爲に事件が起つたと云ふのであらう。

秋の屋 江戸で法印と稱したのは、多く修驗者のこと(田町の法印さんの類)であるが、この句意はよく判明しない。或は人身御供の場の光景かとも思はれる。
 東 魚 法印の豫斷、占が早合點に失して事件が間違つてきた。悪い方に展開したと云ふのを、闇になりと云つたのだらう。

(504) 引摺おとす御油の近付

省 二 御油の出入は街道の名物の一つと云つて居る。それに近付とあつては、どうして見逃して貰へやうか。仲々の難所だ。

秋の屋 旅人が馬に乗つて通るのを、近附の出入が見認

めて、腕力で引卸すのである。

東 魚 馴染みの出女に引摺卸ろされる處、野趣横溢。「近付」といふ言葉が如何にも面白い飛んでもない。近付ではある。

省 二 夏の月御油より出て、赤阪や、の距離は僅に十六町、對出女の詠むた古川柳は多い御油の方へは、警察署銀行等の官廳會社が建つた爲、舊觀を損じてしまつたが、赤阪丈は錦繪通りの町並み徳川時代の史蹟として、保存してよいと、波多野承五郎先生の「隨筆東海道」にある。あゝいふ家並みに「建てられた宿屋兼遊女屋の中を無理に通り抜けて行くのは、餘程氣の強い人でなければ、出来さうもないと思はずには居られぬ」と書いてある引摺おろされる筈だ。

(505) 只有體に替女の手まへら

省 二 其の隠くない姿態たるや、罪なし。

秋の屋 殊更に姿態をつくるはずに、轉た寝をするといふ意であらう。

東 魚 替女の無雜作に寝た姿に、哀れさが深い。

(506) 住持代りの味に若やく

省 二 「味」は乙に、意味ありげにの謂。住持代理だから若い筈ではあるが、その味に若々しくする有様が、目にもちらつくとはろのものがある。

秋の屋 此の若僧、梵妻に意あり

東 魚 イヤに態度をきどつてゐる、笑止な様が思はれる。

(507) 地頭の智恵の出ると夜が明

省 二 地頭は今日の町長村長格以上の権力があつて、一切の處理權を有し裁判官の如き事も行つた。デ茲に紛擾問題解決のため色々證議の結果、よい一案の智恵の出た時は、丁度東が白ら／＼としかけた。

秋の屋 古く地頭といふのは、諸國の莊園に置かれた職名であるが、江戸時代の地頭といふは、武家築地の領主のことで、現代の町村長などは、その資格が全く異なるもの、此の句は領地の農民が強訴などを爲たので、夫れに對する謀議の爲に、徹夜したといふのである。

東 魚 單に會議が夜明に達したと云ふ事を、面白く詠んだのであらう。

(507) 初午にむす子の供の口が過

省 二 近所の子供等と太鼓を叩いて遊ぶべきなのに、供が何にか憎まれ口をきいて、八分のかたちとなる。

秋の屋 私はこの句を、黒助稻荷の初午祭をよむだものと思ふ。息子の供は所謂野太鼓である。

東 魚 むす子とあるから、秋翁説の方らしい。

省 二 いかにも。前私解取消。「口が過ぎ禿に蚯蚓は

れにされ」は、太鼓の口が過ぎた故、それが性分であり職業である。「息子をばどんつくにする太鼓持」など詠まれてゐる。

(509) 翌と言ふ紺屋の女房美しき

省二 女房の美しさにめんじ、今度は堅く約束して歸る。紺屋の明後日といふに、翌と言はれてみれば尙ほ更となる。「むだ足を一日置に紺屋させ」。

秋の屋 美しい女房なら、幾日冗足しても苦になるまい
東 魚 美人は徳である。

(510) 心ほと言かねて居る袖たゝみ

省二 着物を袖たゝみにしつゝ、今日は思ふ丈けを言ふつもりが、やはり口に出ない、女らしさである。——袖たゝみなどして居るからいけないのだ。

秋の屋 一夜を他所に明かして歸つた、後朝の情景であらう。

東 魚 怨言を盡せぬ處に、女の若さ、しほらしさである。「袖たゝみ」がきいてゐる。

(511) もとの京から通ふ棚經

省二 「もとの京」は奈良。「朝寐では昔の京はいけぬ所」、「むかしの京に残る店賃」(ム十一)。今の京は京都、「朝寝でも随分今の京はすみ」。——昔馴染みの坊さんは殊

によいものだ。

秋の屋 奈良から京都へ通ふ棚經の坊主では、「木幡の里に馬はあれど君を思へばかちよりぞ行く」といふ、情熱は少しも有るまい。

東 魚 棚經には例年の如く、馴染の僧が遠い奈良から通ふ處に情味がある。

(512) 寺に寝たのも吉原のうち

省二 「寺で彼是いたしたと息子といひ」などの申立てが、通用せずしてイヤ吉原にきまつてるとなる處、息子の素行がブラツク、リストものだからである。

秋の屋 何でも平素が肝心である。

東 魚 可笑味がある。

(513) 新しくなる九日の釋迦

省二 四月八日は甘茶の行水。

秋の屋 黄金の膺燦として輝く。

東 魚 お釋迦様をホントに茶にして句だ。

(514) 堪忍はくらしい所へ連て行

省二 所こだ。ならぬ堪忍をするさ、など、暗い所で慰める。明い場所では容易に腹立ちは鎮まらぬものだ。

秋の屋 淺黄裏の忿怒なども、屏風の内の暗で鎮まる。

東 魚 奉公人などの場合のやうに思はれる。朋輩がな

だめて呉れるのであらう。穿つた句。

(515) また塗箸に逢ぬ正月

省二 〓 お正月雑煮をたべる間は、白箸を用いたもの、
「三ヶ日よばれたやうな箸でくひ」。太箸。雑煮箸、一名柳
箸といつた。(四條流では、雑煮の時、柳の太箸を紙に包
み水引で結ぶ例)。正月早々から箸の折れたりするを忌み
主として柳でも先きもなく太く製したものだ。「箸もま
づ太きを笑ふ雑煮かな(千浦)。

秋の屋 〓 正月も十五日以後には、太箸を必要としない。
東 魚 〓 素地のまゝの白ろくとした太箸に、すがく
しい正月気分がある。

(516) 鞆は大事のうは言をいふ

省二 〓 平素は神妙に辛抱して居る鞆の身の上、腹一杯
に貯つて居る事を、自ら諺言にぶちあけてしまふ。大事な
事だらけであらうから、病氣の上では濟ませぬ後の休職と
なるかもしれぬ。

秋の屋 〓 「うは言」は熱病などに罹り、精神の混乱した時
に發する言語で、平素秘密にして居た事をも、忌弾なく言
放つのである。

東 魚 〓 可笑しくもあり、又哀れでもある。

(517) うつくしい意趣を柱に寄かゝり

省二 〓 意趣——それは、やはり戀だ、柱に寄かゝつて
一思案。

秋の屋 〓 情夫より手切話等を持出されて、頗る忿滿に堪
へず、柱によりかゝる女であらう。

東 魚 〓 浮世繪情緒である。「叱られた忝筆筈へ寄り掛
り」と似た趣であるが、やゝ年長けた方である。

(518) 機嫌直しの夜着に三人

省二 〓 服にすへ兼ねるところがあつたのであらう。
(聊かふられ氣持で)で御機嫌取り直しに三人雑魚寝。

秋の屋 〓 川の字に寝る、夫婦と子供だと思ふ。

東 魚 〓 雑魚寝らしく思ふ。

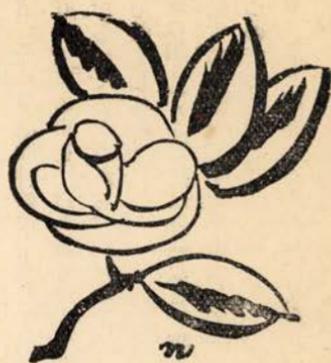
(519) 夜中ふまれて大阪へ着く

省二 〓 十三里の舟行。踏れたのを知つて居る位ならば
結構。「目がさめて見りや大阪になつてゐる」と、八軒屋に
つく。(初篇の「無理な枕で大阪へつく」の解参照)

秋の屋 〓 他人の腰をも枕にする。

東 魚 〓 わけもなく可笑しい、乗り馴れぬ人が、いやヒ
ドイ目にあつたと、ふくれ返つて八軒屋へ上る様が思はれ
る。「夜中」は一晩中の意。

……つゞく……



川
柳
塔

路
郎
選

山
本
雨
迷

赤インクの何時まで夢を迂べらせる
秋の陽をふところに入れて兒と遊ぶ
姉えちやんはいゝなどやつた兒が歸へる
毛虫焼く煙りは空のものでなし
わくら葉は一步手前の地を措した

西
田
艸
樂

人魂だそれと女を寒むがらせ
保険金俺から死ぬる事にされ
老人を手なづけて指の石光る
凡人で達者がいゝと子を思ふ
我橋出番を急ぐ傘を上げ

増位汀柳

母の死も何をか神に質すべき
嫁にゆく鏡をみてる母娘らし
笄はゆらぎて四海波靜か
霧といふ寂しさ二人ゐてさへも
このまゝの戀に死すべき縹緞かな
憎しとも思ふは波の上の鳥
草ながき秋としなればわれも瘦せ
アメリカは國の東と知るばかり
つとめとは人の靴紐結ぶなり
見渡せば雲のかゝらぬ山はなし
待ちぼうけとがめる資格どこにある
浮かれ男とひとは言ふらし夜をゆけば
獨りなる宿命とおもひ妓寝る
手枕は一夜かぎり知り給へ

山本丹路

凡俗の酒ひよろ／＼とたちあがり
酒呑まぬ日の五圓札たゞのさつ
悪友の見舞うれしいものにふれ
誰にともなく馬鹿々々と叫びたり
あるときの女寢れし花のごと
夏の夜はまだ宵ながら厚化粧
灯を消しておもふ淋しき人の數
しやべりつゞけてトツチンカンなこと言ふた
コップが破れたそれでよしそれでよし
げら／＼笑つて夏去りゆきぬ
ゴミ箱をあさる者よダイヤは出ぬか
あしの裏のうつくしき坐りやうかな

撫順回想(一句)

軍需工業の煤となる石炭を掘る掘る
統制の出来ないものに屋根がある

○ 岩崎柳路

丸髻が大きく寫るいゝ月夜

岡田某人

噓一つ持てばよく散る齒磨粉
うちの子の昆蟲趣味を不氣味が
借電話わめき散らした譯を云ひ
紙芝居残暑の汗を見上げられ
義太夫を褒めて若さを疑ぐられ
その揚句添ふたを吏員無表情
旅疲れうちの竈の火が赤い
ビルへ來て啼いたで蟬も話題なり
箸を割る一瞬旅の身を悟り
秋服にするきつかけの雨が降り
客はまだ若く牛肉買ひに出る
秋の蝶洗濯の手を拭いて立ち

西村明珠

全快をしたらしたらと哀れなり
親しさに端書廻して書き加へ
もみくちやになつてお守出でたまひ
よく似合ひますに女房は釣り込まれ
先生の家で先生品がなし
かつがれて寄附金よせる事となり
文學の素養があつて社をやめる
もみあげが揃ふた若い巡查立ち

會我部宵明

耳のペンとり食堂へ會ひにゆく
あぜ豆を盗めと月が冴えてゐる
鼻風邪で時下秋冷に御座候
頬骨も顎も貧しいものゝうち
鰻釣り僕は勤めのある身體
サイドカー葬列を抜く音でなし

夏の甲子園

平井春光

始球式捕手のミットへゴロで来る
 妻を笑はせて今夜も無事に更け
 マネキンの度胸に惚れて一つ買ひ
 捨てた紙デパート待つてたやうに掃き
 断髪の前をひそめる癖がつき
 久濶の姉妹どちらも七ヶ月
 秋風を土管の中で聞いてゐる
 父の力で、カツレッツを切り
 龜の子が逃げてる底は透きとほり
 名園に小舟が一つ腐りかけ
 秋風に目高の波は向きを變へ
 十圓もあれば消される惱みとは
 秋の夜の夢は一服しに起きる

須崎豆秋

市場没食子

病弱の因にしられた好き嫌ひ
 條件にそはぬ男がうよゝ居
 改名の其の後も醫者と手が切れず
 なんぼ金入れたか知れぬ顔の痣
 形式にながれ不用な手數かけ
 秋の雨こゝに退屈男あり
 策見事成就仲居が酔潰れ
 初任給下げる事務室での話
 叱つても賞めても母の手におへず
 亡第一週忌(九月五日) 一句
 一週忌傳ひ歩きを子がしかけ

曳かれたある老人(三句)

尼 緑之助

地獄より悪い留置場だと嘆く
 金に責められし老骨の浅間しさ
 七十の行路ちよつびりひよろづいた

西 いわを

はしやぐにしては事件が小さすぎ
速断を避けて扇風機に向ひ
統計簿人生觀を變へてみる
分譲地トシボと行たり來たりする
中元のシロツプがある違棚

初 誕 生

歡びを分つ 袱紗の色もよし

村 松 夢 裡

感心をすれば 饒舌限りなし
素顔なら見たいわ橋の立話し
適材にされて不足も云へぬ顔
お互が自惚れてゐる金と銀
頬紅のどつかやつれた二十六
陣痛のその日を話す子の寝顔

喜 多 春 秋

火事になる火もあるに火のつかぬこと
えらくなれ俺の次ぎまでえらくなれ
太陽へ妾宅であり白い蚊帳
食つてゆけるのか景色の中の家
山へ溶け込みたしこの地を死所とせむ
灯の色にゐて睦しい農家の夜

朝 田 新 水

哲學が疎遠にするか許嫁
一圓の貯金國許まで知れる
立身は東京までの汽車の中
屈託を救ふ心に子をあやし
妻も老け髭剃ることもおこたりぬ
出戻りの振向くことも嫌と云ふ
晩酌の前に成長した子供

平井與三郎

履歷書に子の泣聲が泌みるやう
子が出来てたつた十日がすんだだけ
安産はよいが子供が少さすぎ
醫者だけの拂ひへ會社やすまれず

中澤濁水

カンバスの位置に迷つて疲れ切り
打消してゐる嬉しさがこみあがり

後藤青兒

夕立をハヂク病院よく儲け
食堂に舞妓が來てる線と色
屋上で遊ぶ子供へ山の色
已れだけが人間である喋べり様
盂蘭盆會お經の次が勝太郎
營養價鰯ばかりでも居れず

奥野禿山

晦日にも五日拂ひもあてがなし
散財が好きで權三部屋頭
部屋住みで遊興税は群を抜き
どうしたらよいかはすではらませて

青木史呂

大阪府一步も出ずにハイキング
葬つてしまえば噂それつきり

荒井英賀夫

落ちぶれて他人様とはこんなもの
錢湯で肥へる悩みを聞いてゐた
手遅れへ金の偉力もあはれなり

吉田水車

こんなのはどうかとばかり雲の峯
今見た鮎の上る料理屋
シヨウウインド實はネクタイ直すなり

石曾根民郎

天井の低さにおんなくしけする
ひとの世のくらしが寺に笛もある

水谷鮎美

遺族みな彌陀の浄土を信じきり
實印は水谷信雄——相續か

清水友帆

與太者へゴルフズボンがよく以合ひ
思春期の顔へ剃刀切れぬなり

宮岡白峯

大阪の乞食の事も話しとき
醫化學を否定しかけたあんまの手

三鴨美笑

旅に出て顔のきかないたよりなさ
看護婦のなれて梨むく秋の宿

粒々集

長崎柳秀

いたゞいたことを苦にする下戸の猪口
忍従の姿に戻る肩の線
ビール飲む速さも秋の夜となり
世につれて父も洋酒を飲み習ひ
警報のあとのラヂオは歌謡曲
懐手箸持っただけに出す姿
口語體女は甘いことを書き
倦怠期又しても云ふ女房まん
あんないゝ人をこんなにするも酒
満を引く冷へたビールは眼をつむり
生活は安定別荘に病みほうけ



何處へ行く

—川柳指導講座「わが友達」選評—

川上三太郎

嘗て僕に結婚談が持上つた時。

「私は生涯如何なる事があつても妻に「出て行け」といふ言葉を吐かない。但し事が友だちに關し妻と意見が對立した場合、僕は躊躇なく妻の方を棄る——」

即ち總ては相談づくで行くが「友だち」だけは絶対權を主張したのである。爾來十五年それは圓滿に實行され今日に及んでゐる。従つて僕の生活には友だちといふものが、かなり重要且つ上位を占めてゐるのである。その代り僕も亦その友だちの生活のかなり上位を占めてゐるといふ確信はある。僕が死んだ時一

番、悲しむ者は、僕の妻や子供ではない。

それは友だちである。

友だちは斯かく尊く大切だ。然かも甚だ稀有である。彼は何んな事をしても怒らないし笑はない。

僕が善い事をして勳章を買つたら彼は言ふだらう。

「あいつの事だ、それ位な事はあると思つた」

僕が悪い事をして刑務所へ入つたら彼は言ふだらう。

「あいつの事だ。何か理由があるんだよ」

諸君の友だちも屹度さうである。僕はそれを川柳して貰ひたかつた、だからわが友達と

特に「わが」と斷はつたのである。然るに集つた句を見ると、それは單なる友達といふ課題に依つて作られたる十七字であつた。僕は茲に至つて題詠の題なるものゝ持つ悪い力と、それに引づられてゆく我々の非力をおもつた。僕は二十年前言つた。

「句選は著しき創作なり——」

と。だがいま更にそれへもう一つ加へやう

「出題亦然り——」

「わが子」「わが親」「わが生活」「わが友だち」——以上今日まで出題四つに及んだが、それは何れも單なる子、親、生活、友でなく

何處へ行

.....A.....

.....B.....

それらを諸君の生活の中から摘出して貰ひたいのだ。然し從來の題評觀念の根強く張つてゐるためと、生活を川柳するといふ事のむづかしさのために、結果的には何時も課題的であり課題吟選になつてしまふ。然しこゝで諸君も僕も落膽しちまつてはいけない。この道のはろけさは實はこんなところにもあるらしい僕は基督といふ男は嫌ひだが、「クオ・ヴ・デイス」の最後に近い章に描かれた基督は好きだ。

「やがて陽は丘の上に現はれた。然しそれと同時に驚くべき光景がベテロの眼を打つた。それは金色の輪が上へは昇らないで、空から路に向つて下りて来るのだつた。
「あゝ眩しいものが近づいて来る」
暫くしてまた言つた。

「誰かゞ日光の中を歩いて来る」
従者は吃驚してベテロを見た。

「貴下は何をさう一心に見てゐるのです？と不思議さうに訊ねた。が、ベテロの手にしてゐた錫杖はハタと地上に落ちた。彼は身動きもせず口を開けた儘、靜に前方を見詰めた。その顔には驚きと喜悅と恍惚が一緒に現はれてゐた。

突然彼は手を前に擴げて叫んだ。

「おゝ基督——基督」

彼は地上に顔を伏せた、長い間の沈黙があつた。やがてベテロは涙にむせびながら言つた。

「主よ、何處へ行きたまふ？」（クオ・ヴ・デイス・ド・ミネ？）悲しいそして爽やかな聲が聞えた。

「お前が見棄てるなら、私が羅馬へ」
華美と放埒と淫樂の羅馬に見切りを付けて去らんとした老ベテロの代りに、彼は行つてもう一度十字架にかゝらうといふのだ。僕は今日まで幾度か川柳に失望、落膽した事だらう。然しその度毎に何時でもこの一齣を思ひ出す。そうして鞭打たれるのである。

……C……

あまい友情の映畫なら腐る程あるが、よき友情の映畫は割合に少い。デリー・クーバーの「或る日曜日の午後」以來最近では「會議は踊る」「未完成交響樂」「夕暮の歌」等に若干見る事が出来たのを僅かながらでも悦びたい。よく少女たちがうたふ「歸れるブラック・ジョウ」なんかも好い伴奏のレコードで

聴くと、友情の尊き涙をさそふのである。

逢ふた日の友の瞳をなつかしむ

「逢ふた」は「逢つた」若くは「逢うた」が正しい。集句の中では兎に角この句が一番及第點がつけられる。然しそれとても辛うじてパスの程度である。如何にも推移そのものであるが、然しわが友達を一番純情そのもので表現してゐるところに矢張り眞實の力があつた。然し何れにしても作者はもつと作句修練を積む必要がある。但しこの態度を失つてはいけない（句主大阪永井緋紗子君）

ナンバーワン二三四も飲仲間

自分のなだけはみんな酒飲みだといふ事可言ふのなら、こんな泥臭い洒落にもならぬ文句は禁物である。ナンバーワンなんて言葉を一體作者は何の用意と心構えがあつて用ひたのか、もつと眞面目になつて貰ひたい（句主松山芝田靈子君）少く共この題材をして
僕の家の徳利友だちみんな馴れ
位までに燃焼させて呉れたまへ。第一そこまで行かないと特に君をわづらはせるところまで行かないのだ。

久しぶり合つた友は 大人ぶり

「合つた」は「出合つた」といふ心算で書いて

出の字を落したのだらう。不倅せな句なり、「出會つた」と書くべし。然し何れにしても何等他意なき句で

舊友の何處かに残る幼な顔

なんてのは、この頃の鯛のやうに幾らでも獲れるのであるから、もつと大きなのが珍らしいのか、美しいのか、兎に角さうした魚を捉へて欲しい。(句主愛媛武田小天狗君)

落膽の友に握らす五圓札

「マアさう落膽せずと、歸りにこれ一杯やつて行きたまへ」と金を呉れたといふ句で句意を解るが、この句から何も感じる事は出来ない。それはこの句の用語と句の構成が餘りに事務的であるからである。作者はもう少し感激してもよい。特にこんな句には作者の情熱が必要である。(句主大阪森山さわだ君)

.....D.....

最後に諸君の先輩のわが友だちの句を掲げてこの稿を終る。

三人が酔へば三人らしくなり 路郎
敬遠といふ字を知らぬ彼が来る 濤明
女房と三人で出る友が来る 鐵扇花
友だちをまいてそぐはぬ心持 不浪人

舊友と酔うて別れて淋しくて 當百 からう——。
絶交の葉書一枚裏表塊人 友だちのうしろ姿の有難味
久しぶり老眼鏡は淋しいね 荷十 舊友へ手が二本では足りぬなり
友だちに言へて女房に言へぬ事 桃太郎 友だちに羽織を貸して門へ立ち
僕の句も二つ三つ御覽に入れて置いてもよ

料理よし酒よし君と琴福喜へ

南地 宗右衛門町

琴ことう 福ぶ 喜き

電話南五六三番

菓子司

御菓子の御用命は是非當店へ

西區住吉橋北詰北

菊 壽 堂

電話櫻川八二七番

明治以後の川柳年表

(柳誌柳書の巻)

(その八)

西 島 ○ 丸

(書名、誌名)

(発行年月日)

(発行所其の他)

明治新撰柳多留 全一冊 (明治十二年巳卯十月)

東京、日本橋區通四丁目東横丁六、松坂屋佐野金之助板、中本紙十葉繪本柳の一種

面白濃談寄合話 第一會 (明治十六年癸未八月五日)

東京京橋木挽町萬字堂本店發行、神田國藏編輯、菊亭香水校閱「せんりご」として一欄を設く

古今川柳三千題 全一冊 (明治廿二年巳亥九月五日)

東京麹町元園町岡本敬二編、神田錦町井口松之助發行、狂風樓主人撰、東京魁眞樓發行とあり、卅五年八月十八日京橋求光閣書店より再版刊行

新編柳樽 第一 (明治廿八年乙巳五月)

大阪小島六厘坊發行、第三まで出し、あと葉柳になる、四月は誤り、訂正す

葉柳 創刊號 (明治廿九年丙午六月一日)

新編柳樽の改題「柳道」と合併故に葉柳の第一號は第二卷第一號といふ、大阪西柳樽寺發行、四十二年四月まで十七冊出し休刊

轡 (煎茶錄改題) 創刊號 (明治四十三年庚戌十月)

一月一號、四月に四號を出して休刊して居た「煎茶錄」藤井藤吉郎の手により小倉市から「轡」として第五號を發行十一月第六號を出し廢刊

川柳(ツクモ記念號) 第一號 (大正六年丁巳十二月十五日)

香川縣三豊郡觀音寺町上市南柳樽寺川柳會、菊十六頁、三號限のツクモの後身翌七年十月十五日の四號以下不明

ムラサキ 卷の一 (同十二年二十日)

甲府市相生町十六中澤紫雲方川柳ムラサキ社、四六倍四頁、翌七年四月廿八日の卷の三以下不明

イタヅラ 第一號 (同月日不明)

南柳樽寺川柳會發行、菊半二つ折四頁、長猿坊、散天坊、小笑字、笑字坊の四人の句が並で居る

局待川柳全國大會句集 全一冊 (同月 日不明)	葵 第一集 (大正七年 戊午 一月一日)	風 柳 第一號 (同 一月一日)	川 柳 第一號 (同 一月一日)	か べ 第一輯 (同 一月一日)	街 燈 第一號 (同 一月一日)	川 柳 筒井 筒壹 (同 一月)	新撰 川柳詩 狂 全一冊 (同 二月四日)	黒 髮 第一號 (同 二月一日)	現代 川柳句集 第一輯 (同 二月十日)	川 柳 江戸砂子 全一冊 (同 三月十八日)	川 柳 花 東 第一號 (同 四月五日)	川 柳 銀 河 第四號 (同 二月二十日)	う つ 第一號 (同 四月廿一日)	玉木龜堂追悼句集 全一冊 (同 四月 日)
-------------------------	----------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	-----------------------	------------------	----------------------	------------------------	----------------------	-----------------------	-------------------	-----------------------

川柳やよひ會發行、菊半五四頁、募集吟全部を刷た多き選者用本

京都市本國寺畔柿本町川柳あふひ會發行、四六二つ折四頁、第三集にて終、千枝、富士子の同人句集

東京、本所大塚蛙甫方風樂會發行、四六判十六頁

東京、本所區綠町川柳すなご吟社發行、横長判五十頁

岡山市野田屋町六一かべ土川柳社、菊半三六頁、鶉殿黄八肝煎一號を出したきり

岡山市西中山下一三六龜山寶年坊方發行、街燈詩社、菊半截、十三號まで出る

北海道釧路國道分筒井筒會發行、河内岐一個人誌、四六倍判四併合、第六輯改題準備號「萍」と改題す

東京、神田錦町有朋堂書店發行、有朋堂文庫の一として生る、山椒選

東京、日本橋區松島町四、みやこ吟社(中川人形子宅)發行、大正七年八月一日第六號を出して終刊

東京、小石川區大塚仲町甲寅出版社、菊半廿頁、大正八年三月五日二年第二號を出して休刊

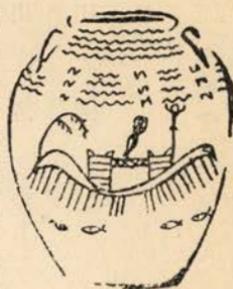
東京神田東書院發行、今井卯木著、明治四十五年岐阜市よより出でしもの再版

東京、小石川區市民詩社發行(四號より神田、八號より本郷に變る)菊十六頁、八年一月五日二の一號(通卷九號)で休刊?

横濱市青木町九、川柳銀河社發行、四六判和紙五葉、田中美水編輯、九年三月十二號以下不明

東京、芝區南佐久間町うつば川柳會發行、四六判横綴、廿四頁六月三號以下未調

東京、八丁堀月都會發行、横綴隱寫版刷



北澤莊窓話

山本雨迷

秋も仲秋に入る頃から一入物の哀れが身に泌みる。

亂れ咲くコスモスにしても、はや心のどこかを捕へそうで、じつと見てゐることに一種の不安を感じて思はず眼をそらしたくなる。虫の音にしても、穢せきみに聞えて灰色の神經を尖がらせることの數々が點景となつて行く。

山には、柿の實が彩どるにしても、そゞろに迫まりくる冬への身だしみに、落葉の愈々増え行くのを見るにつけ、人間的な感覺の鋭敏さに觸れずにゐられない。

父の三回忌が周つて來た、はやいものである、耳朶に残るいくつのかの追悼を思ひながら佛事を營むことになつた。

父と川柳とは何等の關係もないのであるが私の川柳については、いつも、金の儲からぬ

事には一生懸命になる奴ぢやと云つて笑つてゐた。

柳誌たまむしが九年も私の家から發行されてゐたから自から、川柳にかゝり合せがあつたのでそんな批評をしたものである考へて見ると、趣味としては悪るいものではないと思つてゐたのだと思ふ、ところが、本人は趣味を越えてしまつたので、之れは生活になつたことを意味する。地下では一層笑つてゐるかも知れないのである。

會社の方も一年を経んとしてゐる。毎月の資産表の、理想的に行かぬまゝにもどうか、机と頸引きを續けて來た、努力を捨てかねてゐる現在である。

ハードライトの仕事の如何にも六ヶ敷いともこのほどにして解つて來た有様ではあるが、まだ、残された未開の天地があるかと

思ふと勢ひに乗じて發奮せずにはゐられぬ氣持ばかりが先に立つのである。

エンヂンの律動となる汗落ちる汗の顔あげまた働きて拭ひもせず

の句が生れたのはみな工場の職工達が教へてくれたものである工場の中は文字通り油汗で充滿してゐる僅かな工賃で斯くも懸命に働くのを見てゐると自分等の仕事は明朝さに缺けてゐる事が多々だと痛感するばかりである。

風やあとで芽を吹け川柳

川柳が進歩向上をする様願したのが此の句の眞意だと私は解する。

句は柳翁が心のまゝを卒直に盛り上げてゐるのであつて、其の眞實性の示されたところには何等の疑義があらう筈とてない。

吾れ、が此の眞實性を求めてやまぬが爲めに益々動き、あるの當然であると思ふ。

こゝで私は川柳に就いての本質となんとかに就いて云ひたくはないのであるが、柳界が活眼して此の句意の存するところを知るなれば、柳界は一層明朗になることかと思ふのである。

従つて新川柳、既成川柳とを問はず、川柳の名のもとに大いに柳界が勢力大になり行く事は川柳界にはこよなき御土産であると思ふ。



秋のこゝろ

山本丹路

秋はひそやかに來ると言ふ。まことに庭の隅からでも忍びよってくるやうな氣がする。

——やがて冬が訪れるであらう。かうした、時の推移を考へてみると、この昭和十年も終りに近い此頃、この一年間に私の川柳精進はどれだけ進歩したが、いかな進歩があつたかなにかをつかみ得たか、など、自省しつゝやがて誰にとりもなき恥しさ、不甲斐なき、無氣力さが、そく／＼と身に迫ってくるのを覺える。

柳樽も、武玉川も研究したい。明治、大正時代の作品もしらべあげたい。今日の川柳がどう云ふ方向に流れてゐるかも考察したい、大きくこれからの川柳の進むべき道も究めたい、それがために一時かんじんの作句がお留守になつてもよろしい。何もかも勉強したい。

やるなら徹底的にやりたい。

こんなけなげな野心を始終抱いてゐながら何一つものにしてゐない。俗事多忙に追ひまゝくられてすべてが中途半端のまゝだ。

或る友人は僕の野心に對して、川柳が職業となり得ない限り、多くの川柳家は川柳家と言ふより川柳愛好者であり、單なる投句家以上には出ないであらうと止めをさした。

僕はうなづきながら安心に似た氣持が湧いて來た。川柳愛好者でよろしいと。

併しこの安心はながくつゞかなかつた。本能的に何もかもきはめたい慾望にかられてゐる私を發見したからだ。

しかし友人の言葉は或る程度あつてゐると思ふ。それはいい。それはそれとして私は眞面目な川柳愛好者でありたい。遊戯的な川柳愛好者でありたくない。學術的な氣持でなく、今日の川柳はもはや遊戯的な川柳愛好者をうけないほど進んでゐると思ふ。それに目をつむるのは卑怯に近い。

むきになつてこゝまで書いてきた時、ふつと「藝術とは畢竟悲しき玩具だ」と云ふ啄木の言葉を思出した。私はたゞ苦笑するのみである。秋の夜はいやにつめたい。

こんな宵は蟲ちがひの俳句でも讀んで神經を休めさせたい。

こほろぎや路銀にかへる小短冊
こゝろ足らふ求めゆかむ瞞かな
紅梅さげしをみなに道をたづねけり
蝶の腹優しくは見る齒朶の上
はたはたの杏堪えきれず落ちにけり
きりぎりす思ひ堪えぬや夜すがらを
冬の夜を冴えし瞳と居りにけり

(犀星發句集より)



月街の高臺

路郎・雨迷・艸樂
丹路・春秋・汀柳

前號近作柳楸より

蛇に似た眼で金策を請合はせ

久米雄

艸樂 蛇に似た眼とは執拗な眼であらう、上役かでないれば一目置いた人からの強要に迫られた惱みであらう、この句から、悪型から人のいゝ男が迫られてゐる劇的な情景が想像される、だが「請合はせ」の下五が傍觀的になつてゐる處が少々迫力が殺がれた恨が感じられる。

春秋 蛇に似た眼がこの句の心であり、金策へ蛇に似た眼を持つてゆくあたりは作句定石であると感ずる、然しこの句、あまりに作意に過ぎてはゐないだらうか。

艸樂 この下五が持つ弱さが春秋君の云はれた作意に過ぎた句とされる弱點を持つのである。

春秋 又蛇に似た眼の「似た」が様に様にの句を避けたものにも思はれるが。

雨迷 この句は金策に就いての技巧まけの形ちの様だね
丹路 請合はせは勿論客觀描寫で、その爲めに折角蛇に似た眼と云ふ見付けがあつても物足らぬ感じを讀者にもたせて了ふ。

例外もあります 醫師の言葉尻 義風子

春秋 「下五言葉尻」とは何んと老巧な表現、只私一人の感じかもしれぬがこの「醫師」を醫者とし度い、醫師とあると何處となく堅苦しく醫者とあると何んとなしに親しく覺えられるが作者は如何。

艸樂 醫者の言葉尻の方が確かに柔味があると思ひます

然し醫者の氣安めと云つた風な事を句材にする事は最早陳い觀念に過ぎないでなからうか。

酔ふて行く質屋に青い番頭ある 天 秋

丹路 讀んでゐるうちにふつと曳かれた句である、これと云ふ深みはないが作者が素直に青い番頭と感じた點に氣をひかれた。

艸樂 この句の問題とする處は、ならず者の質屋通ひか態と酒にまぎらして質屋の暖簾をくぐるか、そう云ふ點から青い番頭との對照に相違が出てくる。この句に於いてどつちとも斷じられない點を惜しむ。

雨迷 質屋通ひをする人間が酒を呑んで行くと云ふ事に就いて、その對照である質屋に反感を抱いてゐるといふ階級的なものがひそんでゐるので、寧ろ青い番頭といふ言葉は、さまをみると云ふ言葉の様に思へる。

春秋 私はこの句に甚だすまぬ事ながらひどい事を云ひ度い、それを、何かと云へば酔ふてゆく赤い顔と青い番頭赤と青との對照「よく結へば悪く云はるゝ後家の髪」の様に決して狂句ではないと萬々信するが、嚴びしい連中は何んな眼で見えるかも知れない、句を自選する時は最も嚴かにこの狂句がかつた境地を省く事に鋭敏でなければ知らぬ間に狂句じみた句になつてゐる事がある。

汀柳 春秋君の言はれた様な言ひ方をすれば狂句に近い

様にもとれるが、私はこの句を讀んで、みじんにもさう言つた感じがおきなかつた。艸樂氏の言はれた様に、ならず者又はわざと酒にまぎらせて行く點に疑義は感じた。

あきらめて笑ひませうよ牡丹刷毛 笑 鬼

雨迷 卒直な纏め方がこの句の持つ味でそのものに對する深味と云ふ様なものはない、然し句意の如き場合を少々古風であるが牡丹刷毛と云ふのを持つてゝあるが、表現は出來てある。

春秋 この句牡丹刷毛で、ぼあうと明るくなつてゐる、が凡材を説明したに過ぎぬ。

艸樂 句から想像するところでは女給の軽い失戀のあきらめの様にとれるが、慾を云へばさういふ點をもう少し的確に讀者に與へてほしい。

丹路 リズムもよく整つて纏められてゐるがどうも流行歌趣味に墜ちてゐると思ふ。作者がその意味でなかつたら表現の點に於て、もつと練る必要があらう。

前號川柳塔より

子や家と思へば胸を撫せて置く 明 珠

汀柳 此の句を一讀すれば非常に調子が好くて氣付かなかつたのであるが、再讀して胸を撫でての撫ぜは撫で、はないのかと思ふ。然し、撫でとして此の句を頂戴する。家を外に實生活の修羅場に立つて幾多の痛苦をなめてゐる家

庭を思ふ夫としての境地が巧ましく云ひ表はされてゐて胸に答へる句である。

艸樂 父として家長としての責任観からこう云つた境地は屢々遭遇するものである、夫れ丈けに句が概念からも生まれるものと観る弱味を持つてゐる。

雨迷 確かに艸樂氏の評はあたつてゐる様だ、だがこの句は何處か救はれてゐる様な事が感じれる。

春秋 この句は作つた句でなく出来た句である、たゞ作者としては艸樂氏の評の様に概念の表現のみにとゞめて置き度くはなからうけれ共、一句を得て切り捨て練り上げると、斯うした表現にあるのであらう、作者の五行も十行も書き度い事が受取れる。

丹路 淡々たる叙法であり乍ら句の裏に適確に人間苦を漂はしてゐる表現が好きだ。(この時路郎主幹は歸宅された)

世にうとき横顔妻は見てとつた 民 郎

艸樂 作者の述懐として否や應なしにうけとられる句である僕は屢々この句と同じ境地に家庭生活の上に立たされるのであるだから女房はあんまり小さかしくない方が有難いと思ふ。

路郎 大分艸樂君は妻君に痛めつけられてゐるらしいが本當に世にうとき事を自ら知つてゐるとすれば寧ろ妻君に氣の毒なといふ同情の心をそゝぎかけてゐる様にも思ふ。

雨迷 夫婦圓滿雀百までの中にある古い家庭の淡い感傷か、はつは……

艸樂 然し句からうけとれるものは矢張り僕が持つてゐる様な呑氣さも表はれてゐる處が嬉しいのである、妻たるものこの句を觀て一應齒痒がつてみるも、尙よからう。

春秋 「横顔妻は」とコンマがゐらなくてもコンマがゐる様な表現が私の句にも澤山出来るが、古句にもさうした句があらうが先生からお話しが願ひ度い。

路郎 短詩型の事であるから、にをは、或は接續詞を司る例は古句でも現代句でもいくらでもある、然しこの省略が完全に許される場合と許されない場合とがある、著しい例を挙げれば名詞を二つなり三つなり續けた場合にそれが一つの名詞になつて了ふ場合がある時、句意によつて確然と分類する事が出来ずどちらにでもとれる様な場合をまゝ見うける、これは明らかに表現法の拙劣さを物語るものである今、適切な例を見つける事は時間の都合で省略するが、さうした場合に諸君も多く出會つてゐるであらうと思ふ。

カルモチン弱い男を寝かせとき 新 水

春秋 消極的な男をカルモチンが殺さずに寝かせて置いてくれる「弱い男と云ひ」「寝かせとき」と云ひ巧いもので、書けば十枚や二十枚の短篇にはなる句であると思ふ

丹路 所謂川柳らしい面白さはあるが同じ川柳らしい面

白さでも同氏の「洗濯が好き女房に脱がされる」の句の方が優れてゐると思ふ、これは句に作者の生活が正直に浮彫されてゐるからである。

春秋 洗濯の句は巧い事は違ひないが少し句想が陳くはないでせうか、

路郎 陳いと思はれる程、それ程古句ばり表現法で案外人の見つけぬ處をつかんでゐるのがこの句の生命である、とにかく一讀した時に非常に朗かである事も嬉しいこの句に比べてはカルモチンの句は多少の作意が働いてゐるのでいや味だと云へば云へぬ事もあるまい。

春秋 私が陳いと云つたのは大正時代の川柳めいてゐるのを指したのです。

路郎 大正時代の川柳と一言で云ふのはどうかと思ふ、陳いと云ふ事は内容的と叙法との二つに分けて云ふ事が出来るが同じ陳い表現法でも洗練された表現法に内容の新味が盛られた場合はこの句の様に存在價值が認められていゝと思ふ、であるから先づ陳いと云へば内容を主にしなければならぬが、大正時代の句をひつくるめて陳いと云つて了ふ事は餘りに大まかな批評ではあるまいか。

艸樂 生命のある句は又珍らしい内容でなくとも古句にして永久に新らしいもの、この句の場合なども實生活から生れた潑刺さが躍如としてゐる處は境地の陳腐の句と同一すべき點はない。

春秋 私は皆様の御説を伺つて成る程と教へられました私の感じたのは前句に比して後句の陳いと云ふ意味なんですが。

空青くふるさとの味水の味 機見女

路郎 この句と「大阪の灯はあのあたり天の川」の二句にはたしか歸省と云ふ前書があつた様に思ふが、例へ前書はなくても句々が澄み切つてゐて田舎で詠まれた句である事は背かれる、表現の點から云へば全く隙がない句の味から云へば俳句に近いほど淡々としてゐる、然かも俳句でなくて確かに川柳である、田舎に歸るとこれ程までに心境が澄み切るものかと一讀した時に感心した句である。

雨迷 詩情の豊かな作者に敬意を表はさずにはゐられない、然かも夫れが閨秀柳人の心境を思ふ時さうした雰圍氣に生きてゐられる事を羨やましく思ふ。

艸樂 「ふるさとの味水の味」と押して嬉しい詠嘆が讀者に響く。

荷を運ぶだけの俵夫とはなりにけり 春水

艸樂 亡びゆくものゝ薄い影が哀れに出でゐる、下五なりにけりなども淋しいうちにユーモアがあつて自然にうけとられる。

春秋 九月號近作柳樽十三頁尼崎の正柳君の句に「俵屋がまだ食つて行ける町の幅」の様に亡びゆく車夫の姿へ町の幅とか何んとかこの句も表はしてほしい尤も町の幅に

しても道の幅だらうし、さうでなければ私は満足出来ない
のであるが。

艸藥 作意は全く町の幅の句と観點が違ふのであるから
内容的に之れ以上求める必要はないかと思ふ、仲仕替りに
なつた人力車の淋しい姿は充分これ丈けで出てゐるではな
いか。

汀柳 乗る人もない俥に荷物を運んで行かねばならぬ年
老ひた俥夫の、いみじくも衰れな姿が彷彿とされてゐる、
いゝ句であると思ふ。

雨迷 下五の「なりにけり」といふ表現法はまゝ句を誤ま
らす事が多いのであるが、この句はさうした誤り易い處を
完全にそれで句意を深く云ひ表し得てゐると思ふ。

横ちびた靴 停年を淋しくす 宵 明

雨迷 この句は少し理に落ちた句の様であるが敢然とし
て隙のない事が彩けてゐる、作意にすら／＼とした伸びや
かさを缺いてゐるのは理に落ちた點があるからだと思ふ。

艸藥 何んだか調子がこだつてゐるのが傷で耳障りで
あるのが惜しまれる。横ちびた靴と云つた言葉が生硬に聞
えるせいだらう。

丹路 僕は又反對にリズムに張りがあつてもすれば詠
嘆に陥入り易い心境を脱してゐると思ふ。

路郎 表現の難は「横ちびた靴」と「淋しくす」との調和を

缺いた點にある少しく感傷じみた句であるが表現のギョチ
なさが夫れをぶち毀はしてゐる。

(九月十八日夜、於路郎師寓居孔子園 汀柳筆記)

家傳藥 王黃華

主治効能 (軟膏)

肋膜、胃 腸、神經痛
リヨウマチ、ぜんそく

藥價 三日分 壹圓四十錢
七日分 貳圓八十錢

發賣元

上 瀧 實 行 堂

大阪市旭區鳴野町五六九
電話(94) 東三九一一番

各 種 旗
七 寶 徽 章
メ ダ ル
カ ツ プ

川柳雜誌社指定

大阪上六

加藤旗徽章店



天保山より高坂城まで

竹内 機見 女

縁丸遭難のあの恐怖の未だ消えやらぬ七月二十七日、東京で洋裁を習つてゐる親戚の静ちゃんの歸省に刺戟されて豫定より早やく故郷の土を踏みたくなり一緒に天保山棧橋より大智丸の客となる。

午後四時に解纜した船は煙の大坂に別れを告げて神戸に向ふ。天氣は快晴だつたが、ラデオによれば新しい颱風が発生して北上しつゝあり、海上は警戒を要すとの事で、デツキを散歩し乍らも幾度か空を見上げ、海を見下し救助ブイに眼をとめて話はともすれば縁丸の上におちる。五時すぎ神戸寄港と同時に静ちゃんも元ブラをきめこむ。黄昏の元町で異國情緒を満喫してゐると、辻で何かあつたらしく、もめてゐる。遠くから見守つてゐると、力車のオツさんと外人とがしやべつてゐる。その外人に力車の一部を損はれたらしく

國際的の喧嘩だ。一重二重に取巻いてる連中も日本人、印度人、支那人、白人等だから面白い。或る喫茶店で一時間餘を費して歸船。八時に抜錨、いよ／＼船は美しい神戸の街の灯を後にして南へ南へと走る。月なき空には天の川がはつきりと横たはり、指さして幻々なじみの星々を語るのも旅なればこそ、星あかりに西をのぞめば淡路島が黒く横はり、何處の灯がなつかしく瞬いてゐる。比較的このあたりは波が静かなので、今までの不安も何時の間にかあれやこれやと明日のコースを考へてゐる中に、かき消されてしまつた。十一時過ぎ肌寒くなつて船室に入る。人いきれの中はどうやら醒めては眠り眠りては醒め、五時近く起き出してみると、速くも黒潮渦巻く曉の海に偉大なる室戸岬を見出した。急いで身仕度を始めたが、何様此處は波が荒くて難所

中の難所殊に折柄の土用波ださすがの私も嘔吐を催し、デツキにへばりついてしまつた。岬を西へカーブした所で投錨、土曜日出帆に限つて、大阪商船では遊覧券を發行して、その人達のために室戸岬に停船する事になつてゐる。私はもう一度室戸岬を見たくなつたので、その券を利用したのです。静ちゃんが、「氣分どう？もう降りるのやめて高知まで一所に行きませうよ。」とひきとめて哭れたがその氣にはなれなかつた。汽笛に應じて津呂の港から小さなトントントン船が波を蹴立て、やつて来る。いちらしくもあれば、あれに乗るかと思ふと心細くもなる。やつと辿りついた小舟からはローブが投げられて、本船からはタラツブが下ろされた。下りる人を見渡すと十人位。いづれも男の人ばかりと思つてゐたら三十位の女の人を見出してうれしくなる。勇を鼓して三番目にのり移る。私の次まではよかつたが、それからが大變だつた。小舟が波に高くもち上げられたと思ふと、紺碧の海底に吸ひつけられる。乗り移るは今だと思ふ瞬間はげしくぶつかつてタラツブがメリ／＼と斜に歪む。飄を手にした老人など、今にも海にはまつてしまひそうで見えてゐる者をハラ／＼

させる。やうやくにして本船を離れて津呂に向ふ。ふりむけば大智丸は黒い煙を吐いて西へ進み始めてゐる。静ちやんに手を振つて挨拶を返した。

目ざす津呂の港は、土佐の偉人野中兼山先生が開鑿されたもので全く岩石をくりあけた避難港である。磯の香と生臭い匂ひがこめてゐる漁村に上陸すると赤銅色の女達が男の留守を働いてゐる。島に磯に。バスが私共を待つてゐた。上陸者の中で、ほんとうの遊覧客は、寫生旅行の學生と、五十あまりの老人と、私の三人だつた。飄の七十過ぎの老人は此處が高知だと早合點して下船したものでらしかつたが、船酔で一步も動けないと云ふ。休養するなら半里もゆけば岬に保勝會館があるからと、案内人になだめすかされて、漸く私共のバスに同乗、日本新八景の室戸岬に向つた。夏の早朝の澄み切つた風が快よく顔にあたる。早やくも右手に巨巖が聳え、左には梧桐の自然林が見える。維新の風雲児坂本龍馬と並び稱される中岡慎太郎の銅像が、はるかなる海を見下してゐる前を一同襟を正して通過。やがて保勝會館。ペランダのソフアーに身をなげると太平洋の荒波が大小數多の岩

石に打かけて、裂けて碎けて割れる光景が都會に生活する我々の未梢の神經を打破して呉れる。波が高い上に船は八百噸位だので二時間近くも運着し、爲めに期待してゐた海からの日の出の壯觀は見るともなかつた。サーピスの食事の後、老人は息子さんが神戸で判事をしてゐるとか、又その學生はお寺の二男坊で京都の美術學校を卒業してゐるとか話してゐた。やがて案内人とバスガールに連れられて、太平洋の怒濤を伴奏に奇岩奇勝の間を歩るく事となる。月見ヶ濱瀆頂の瀆、大師目洗の池、龍宮巖をすぎて尙もゆく巖間に生ふる榕樹の群落が目につく。不斷の風浪に噴まれた姿は庭師の丹精も及ばぬ美しさ。此方の斷崖に密生した熱帯植物と、狂ひ來る怒濤の中に豪宕雄大な姿を現はす奇岩こそは里沙姑巖、岩頭に立つて學生がスケッチをはじめる時、老人があのお方は寫生に來られたんやから、ほつといつて行きますやと私を促す。鉦石の所では、角のとれた楕圓形の石に小石をうちつけると、鐘のやうな音を發し、地獄の底までもとゞくとか。鑛物質を含んでゐるのだらう。御藏堂では大師がいまだ若い頃、こゝで難行若行を積まれて遂に佛教の眞理を發

見された所「僕も食事さへ運んで呉れたら、この洞は涼しくてもつと偉大な發見をするんだがなあ。」と一行を笑はせる。行水の池、大師杖の跡、一夜建立の岩屋など、このあたりは上人の遺跡ばかりだ。頂上まで八丁餘の山道はととも私は苦しかつたが、東寺に參詣もした。その途中とかげと蜘蛛の喰ふか喰はれるかの闘争を見て、その野性におどろいたり、五六年も會はぬ友にめぐり合ひ涙が出る程うれしかつたりした。昨年九月の風害でこのあたりの樹木もかなり損ぜられてゐるが、いづれも緑したゝるばかりの鮮かさ。展望臺附近には橋の野生あり、天然記念物の指定なると聞く。展望臺に學生とバスガールと私と三人で登つて見た。これも風害で螺旋狀の階段も鐵棒を残して、そここゝ踏板がはづれてゐる。のぼる程に周圍の金網も破れたり歪んだり、頂上は足場も屋根も形ばかり残つてゐる。風の強い日は危険で登れないさうだ。眼下に見下す室戸岬は男性的に突き出ており眞白き海岸線はゆるやかに果てもなく續いてゐる。私は疲れて體がフラ／＼するので座つたまゝ風のひびきと、波の音をきいてみた。「戀は頂上にて」見るともなく見上げた天井に

かう樂書してある。たよりない足取りでそこを下り、一行と共に燈臺へ二三丁下る。時間がないので素通りした。海拔五百尺の緑の木の中に白く屹立してゐる海光達三十海里のこの燈臺に満腔の感謝を捧げて下山。これで一通り見終つたわけである。さて之から先刻のバスで二十五里の海岸のドライブだ。保勝館をふりかへると、離れの部屋に、さつきの瓢の老人が白い鬚をなで乍ら悠然と女にビールを注がしてゐる意外な光景を發見して思はず苦笑した。バスガール美聲を發して次々と眺めにうつる土地、景色について要を得た説明をしてくれる。三人だけの時はよかつたが、途中で普通の客ものせるので、遊覧氣分を殺された。沿道各所の野村バスの出張所に来ると、誰か必す今日は幾人かと問ふ、すると運ちゃん「たつた三ツぢや」と答へる。「少ないのう」まるで魚みたいだ。晝食の出る豫定地住吉に着いたのが二時近く。バスを下りて磯見ヶ丘を見下す棧敷におちついた。食事と共にした四十がらみの男が仲居をつかまへて、この女は見た事がある一本のお酒に上機嫌だ。やがて私共三人を等分に見乍ら「どうです皆さん、このひとにチップを出したら

どんなものでせう。」と云ふ。判事のお父さんは船にのる前からこゝした人だつたがこの時も「さうですな」と相變らず幸福さうな御面相だ。私は黙つてお茶をすゝつてゐると、「僕は嫌だ」と吐出すやうに云ふ學生をとりなし顔に老人が「そらあんたは學生はんや、その代りこのお方に、ハハハ……」と私を指す。甚だ御迷惑な話である。食事が終ると座をはづして部屋を借りて身繕ひをした。やがて來て見ると誰も居ない。バスの方へ行きかけると、松林の陰で憩ふてゐる馬が面白いとて學生はスケツチに懸命だ。老人は先に行つてしまつたらしい。さすがチップ事件が氣になるので歩くき乍らきいて見ると、誰も出さなかつたと云ふ。あのひとに悪い事をしたやうですまない氣もした。三時すぎ高知公園着。老人は四時の船に乗るとお城へも上らずに私共二人を残してそのバスで棧橋へ行つてしまつた。袖ふり合ふも多少の縁、去りゆく姿に健在なれと祈る。

灼熱の太陽も西にやゝ傾き、何時に變らぬ高坂城の偉容、公園のきざしを登りて、頭をめぐらせば、ふかみどりの夏木立からはなつかしの母校が見える。鏡川の清き流れ！あゝ

私は歸つて來た。來てよかつた。何か云はふとして眼をあげたが、適切な言葉が出なかつた。——一九三五、八、一二——

日本名所
名物川柳

投句募集

四國の卷

選者 前田五健氏

(三) 室戸岬 三句

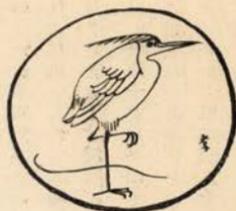
×切 十月二十日

(四) 鳴門

×切 十一月二十日

宛先 本社事務所

用紙 ハガキに限る



當世不通漫談

(三)

梅 本 塵 山

○ 蕪蕪屋の六兵衛

○ 田舎寺道樂和尚

△ 三途河の壽衣婆

△江戸時代には、立役、敵役、女形より、所作事に至るまで、何役でも出来る者を、兼ると稱へて、毎年十一月の顔見世の番附の名前の上部に「兼ル」と書いたもので、之れが正眞の名人とされた。文政より弘化までの間に、兼るの名人は僅に、四世中村歌右衛門、三世尾上菊五郎、七世市川團十郎の三人であつた。

□東京人が、九世團十郎を、劇聖と呼び始めたので、大阪人もこれに對抗して、中村宗十郎を劇聖と呼ぶけれども、聖といふ可きものは、千年に一人出るか出ないかで、同時に數人ある可きものではない。

○宗十郎が劇聖であるならば、同時の人で劇聖を呼んでよい俳優が外にも有る。

□近頃、やたらに聖の字が濫用されるが、昔も書聖、畫聖、歌聖、詩聖等が有つたけれど、餘り新しい聖は、有難味が薄いやうだ

○恭聖、棋聖はまだ可いが、東郷元帥を、聖將といふのは、俺はどうかと思ふ。

□今に政治家に政聖、相撲に相聖、淨瑠璃語に淨聖、落語家に落聖、浪花節語に浪聖などといふ、不思議な聖が顯はれるかも知れぬ。

□石川五右衛門の、盜聖はどうだね。

□三浦屋の高尾も、傾城とせず傾聖とした方が宜しからう。

○劇聖で思ひ出したが、大阪人は應治郎を劇界の神様だといつてゐるね。

□あの男は冥土へ往つて、佛様になつたかも知れないが生前には決して劇界の神様では無かつた。大阪人は應治郎より外に、俳優が無いやうに思つてゐるが、あれは廣い世界を知らないの、古い譬であるけれども井の中の鮒だ、鮒だ〜。

△飛んだ茶番の師直公だ

○自分の惚れた女の痘痕を、嚙と見誤るやうに、篩で樽の底を引掻き廻すやうな、應治郎の皺枯聲を美しい聲であつたなど、大阪人は云つてゐるね。

□東京の梅幸も悪聲で、竹法螺を吹くやうであつたが、應治郎と悪聲の好一對であらう

○餘り應治郎を誹謗すると、大阪人に毆られるかも知れぬから、此の噂はこゝらで罷めやう。

□兎にも角にも廓治郎は、大阪の名優であつて日本の名優ではないと思ふ。

△遊藝の三味線も、江戸の末期より明治の初年までは、常盤津が流行して、江戸の下町娘達は、皆これを稽古したものが、今では長唄と清元とが、全盛を極めてゐる。

○婆さんも若い時に、常盤津を稽古したらしいね。

△イエ私は常盤津よりも古い、富本を習つたものだ。昔は大名屋敷の奥御殿で、奥方のお慰みの爲に、三味線を善くする女を召抱へられたが、夫等は大方長唄で、稀には當時豊後節と呼ばれた、富本、常盤津を善くする女が抱へられた。

□武家の娘は、多く長唄を習つたけれども、旗本や御家人達は、貧乏のものが多くて、娘に遊藝を習はせる餘裕は無く、其中の少數の富有の家で、琴、三味線を習はせたが清元は餘り流行しなかつた。

△私の氣に食はないのは、近頃の清元だね、今の延壽太夫を、世間では名人を評してゐるけれども、歌の節が纖巧に過ぎて、如何にも下品だね、亦その弟子達が師匠の悪い癖ばかり似似で、唄の文句の末を、ア、ア

、ア、エ、エ、エ、エ、など、下手な飴細工のやうに長く引張り、特に顫へ聲を出したり、巻舌で飄つたりする奴がある。

○近頃は女師匠まで、巻舌で飄ふ奴もあるが實に言語道斷だ。奴等は清元を、氣遣り唄と間違へてゐるのだらう。

□先代の家元太兵衛(四世延壽太夫)は其の藝の巧拙は兎も、角も如何にも淨瑠璃の語り口が鷹揚であつて、自然に大家の風格を備へて居た。此の人は、江戸谷中の質店三河屋といふ、豪家の長男に生れたが、放蕩をした末に、新吉原の佐野榎樓の花魁と、浮名を世間に流しなどして、遂に三世延壽(太兵衛)の娘お葉の婿となり、四世を相續したもので有るから、普通の藝人達とは異なり、風采も立派な人物であつた。

△前の延壽といふ人は、奇妙な癖があつた。それは舞臺の山臺に登り、淨瑠璃を語り始める前に、懐紙を一枚取り出して、演を一つちんとかみ、夫れから語り出したのだ。

○今の延壽は、巨萬の富を積んで、猶足る事を知らず、金を溜める事に腐心してゐると聞くが、藝人が金銭の勘定をするやうではたとひ名人でも上手でも、もうおしまいだ

ね。

△近頃、常盤津が一向に振はないのは、上手な太夫が居ない故だね。明治時代には上手が多く居たものであつた。

□九世團十郎といふ人は、所作事をする時、常盤津を多く使つたけれども、五世菊五郎は之れに反して、清元を好んで使つた、忠信の道行なども、元は常盤津の物であつたものを、菊五郎がこれを演ずる時に、清元に改めてからは、他の俳優までも、此の所作事は、清元の淨瑠璃で演ずるやうに成つた。

○今の劇場で全く使はれなく成つたのは、富本の淨瑠璃だね、明治の初年までは、先々の豊前や、音羽太夫などいふのが、劇場に出演したものだ。

△あれは語り口が古風過るから、今の人達には好かれないのだと思ふよ。昔の芝居には出なかつた歌澤が、今では新派劇とやらに出るさうだね。

□歌澤が劇場に出るやうに成つたのは、明治三年の三月、中村座の二番目「梅曆辰巳園」といふ狂言が、最初であつたやうだ。

○近來、小唄といふものが流行して、端唄は壓倒され氣味だが、あれは素人が稽古をするのに、端唄よりも小唄の方が、容易であるからであらう。



四・國・遍・路 (其の五)

松山 酒井大樓

と思ふと誰云ふとなく南無大師遍照金剛、南無高野山弘法大師様こゝを無事に出でさしめ給へと祈願の聲にすると思議やありがたや今迄後へも前へも動けなかつた彼の女思はず頓狂な聲張り上げて通れましたとの歡喜。

おせり割無事に通れて嬉し泣き

おせり割只法力に怖け立ち

こんな難行苦行をして參拜しなく共よさそ
うなものであるが此處を通り終へた時の安堵
に似た氣持は試験の難關を突破し得た時以上
だと思ふと吾等は大師様の御試験濟の信仰を
有する遍路で有ると云ふ氣持も手持つて再び
合掌禮拜するのであつた。

おせり割試験の濟んだ氣持で 出

二十番札所鶴林寺、二十一番札所大龍寺共
に標高五百米以上の嶺に有るのであるが、大
平洋に面した方の甚大なる被雪周圍幾十尺共
云ふべき杉檜松等の大木が中頃から或は根元
から引裂いた様な慘痕を残して折れて居る中
には大岩盤を根へ喰付けた儘倒されて居るの
も有る。

巨木の根こそぎ恐ろしい颯風
何れも去年九月の大颯風の産物で有るとの

四月三日 旗日では有るが田舎の家には普
くは建つて居ない、團體強調の必要が有る。

旗立つ日焉不關の片田舎

二十番札所奥の院へ參拜、此の奥の院は四
國遍路の大方は參拜する程の靈場で有る。此
處には俗に御來迎の瀧と呼ばれて居る垂下五
十丈にも及ぶ壯觀が有る、瀧は直下の状態で
有るが中間に突出せる岩にぶつかつて飛沫を
飛ばすこれが粉霧と成つて中間に搖曳して居
るのへ太陽が反映して五彩の虹が現はれる、
と科學的に解説すれば平の平凡の凡たるもの
では有るが、其の虹たると半圓ならで周圍、
其の中央に薄く淀める太陽これが恰も佛陀の
御光にも似たる有様にて中空に浮んで居る、
これを幾千丈の下方瀧壺の當りより望みたる
時其の崇高なる現象に思はず隨喜の涙をこぼ
すので有る稱して御來迎と

御來迎遍路奇蹟として拜み

御來迎學理で説けば譯もなし

更に此處には禪定の窟と云ふ巖窟が有る窟
への通路幾十尺の間は岩と岩との間隙漸く一
人を通ずるに足るの狭さ、先達令して曰く左
の足より這入りましよう、こゝで體を向けか
へますウンと腰を落して岩を抱く様にしてこゝ
こゝは這ひましようなど一舉手一投足先達の
命に従つて潜つて行くので有る、若し此の命
に反して動作を異にせんか佛割面忽ち御先
達さん詰りましたとの悲鳴、何だ俺達は無事
通つて居るのに通れんなんて詰らん事を云ふ
など叱つて見ても事實は詰つて居るのだ、見
れば二十貫にも餘る大女

おせり割窟に肥へたのが悲鳴

そんな呑氣な事は云つて居られない、若し
此の女が詰まつて通れないとすれば差つめ奥
に居る吾等は罐詰だ何ほ精進の惣菜に馴れて
居るとは云ひ乍ら遍路の罐詰は望ましくない

事、此の兩寺の風害も凄いもので有つたが更に高知に入るに及んで驚を深くした、高知領へ入つたのは四月五日であつた、此の日自動車も飛して居たので入念に惨状を見る事は出来なかつたが、土佐室戸岬一帶の凄惨なる被害の跡

凄じなどまだ形容の足りぬ
バラツクが一村續く凄慘さ
バラツクの家並津浪の後と知れ
船山に上つた儘で碎けて居

こうした被害の衆生を救ふべく宗教家は果して如何なる働きをしたであらうか、此の室戸を中心にして札所が三ヶ所ある何れも甚大なる被害を蒙つて居られる事故之が復舊の費を得べく遍路に寄附を要求せらるゝも又當然の事とは思ふも併せて罹災者慰問の爲の義舉を企てられ遍路へ勧誘せらるゝ道は無かつたものであらうか。

一切衆生救ふお寺の眠つて居
御大師の御弟字餘りに依怙の沙汰

さればまだ恕してもいゝ茲に許すべからざるは三十番札所の本家争ひの問題である、土佐では一時廢佛毀釋の聲盛にして札所を幾つも取毀した事が有りし由此の法難に逢つた一つが元三十番札所善樂寺で、此の廢寺の後を

受繼いで今日迄三十番札所として靈場を維持して來たのが安樂寺茲に善樂寺が廢寺の儘で有れば問題は無いので有るが何の理由か善樂寺が再建された、而かも廢寺の跡地へ寺が再建されて見ると欲しくなつて來たのが札所である、安樂寺へ返還方を申込んだが安樂寺は何故か申込を拒絶した、こゝで當然問題が起きて來たので有る。

こう書いて見ると理は善樂寺側に有る様に聞ゆるが容易に斷定する事は出来ない、殊に吾等一介の遍路としては輕々と斷じ得べくも無く又斷じ様とも思はないが、斷じなくては納經を得る事が出来ない、その虚に喰入つてくるのが寺の惡宣傳である其の惡宣傳も彼等同志が唾み合つてのみ居るのであれば吾等は何をか云はんで有るが。

争ひの餘波へ迷惑する 遍路

と成つては黙つて居れないので有る、此の唾み合の爲に無智に等しき遍路又不案内の巡拜者の内幾百人幾千人かが現に迷惑を蒙つて居るので有る或は道順を誤らしめられて二里三里の無駄足を踏み、或者は納經を復せしめられ果は信仰の本義へ疑を抱き物質上に精神上に限り無き損失を與へられて居るので有る由來宗教の争は其の波及する處甚大なる故謹ん

で貰はなくてはならないので有るが他宗の問題は暫く措き吾等遍路の身として本件のみは土佐の一靈場の問題とせず四國八十八ヶ所靈場の連帶責任として一月も早く解決を講じて頂きたいので有る。若し此の儘に數年放任せんか遍路の不備は靈場への不平と成り信仰の減退と成り遂に四國靈場衰滅の導火線となるであらう事を斷言して憚らん。

確執の 兩寺へ高祖苦い顔

土佐は鬼國と言ふ言葉が有るが我等の觀た處では更にそんな事實は毛頭なかつた様で有る、前述の室戸岬附近の罹災の方々からさへ涙ぐましく御接待を頂いた。

惨めなる人から遍路恵まれる

接待の御芳志へ只泣けて來る

泣けて來るのは遍路のみでは無く(前略) かるが故に御信心と有つて御接待の御志——中略一遍の御回向念じ奉る——) 後略と讀經すれば接待の施主も亦何時か涙ぐんで來られる此の人達は必ず去年の大風水禍に身寄の人を失はれたものでは有るまいかと思ふと此接待の有難い事、こんな事で頂く御接待で有るから與へる人與へられる人感謝と感激この美しい心と心の琴線が觸れ合んだから。

接待の施主と遍路の和やかさ

人情の極致を見せる 御接待

球の威力

姫田夕鐘

美と川柳

三鴨美笑

僕の甥が法政の野球部にある、先日野球の技術について語りあつたがその内の一話に投手は剛球とか巧味ばかりでは六大学の投手としては到底おぼつかない常に打者を引付けるだけの球に威力がなければいけないと言つた。

引付けるだけの威力なるほど、うなづかされた。

川柳も毎月発表の内で引付けられる句ははたしていくらあるかと思ふと此の點に十二分の心組で明日への川柳へ精進せねばならぬと

思はされた。

天才なるものは其の人格も備はらなければならぬ。然らずんば却つて凡人よりも劣るものだ。

容貌の美と同時に心の美なることを必要とする。前者の美は造化の美にして後者は天然の美なのだ、容貌の美は或る一定期間で有限的である。

然し乍ら心の美は一生涯にして無期限的である。



びざつ

ア・ラ・カルテ

ある。

是等雙つながら存するところに最大の美がある。

此の中にこそ人間の趣味があるのだ。

其の美しい趣味こそ人間味ある川柳だと思ふのだ。

青樓戲譚

よしだ・すいしや

侍りし藝妓衆の持ちものをとり上げて別にそれをどうすると言ふことはなけれ共、仰山に妓等のさわぎやれるさまをこよなき樂しみとなせしが、今宵も今宵とてさる賣れつ妓の侍るを例によりそのハンドバツクとか言へるものの中を一つ一つ披露に及びけり、七ツ道具もおろかなる其中に五分四角な香水瓶あり、香り嗅ぐひまもなく瓶の口を背廣の兩方の襟裏に押し當てさまおよそ三分が二ほどは果たして得意となり、やがてのことつゝがなくあほうらしきにか泣き相になれる妓の手にかへりし折妓は香水瓶のいたく減りしを笑みつゝ見て言ふには「これへチマコロンだつせ」なりしとぞ。

満月にそむく

平井春光

月はまん圓く、燈火は明るく、虫は庭に鳴きすだく今日此頃の好時節に、無粋な人間共は一枚の印刷物を中に、流血の争ひをはじめだした。私の職場、白谷タクシー争議!

壓迫! 反抗! スパイは暗躍し、デモは亂れとび、兩々鎗を削つて鬨ふさまは、第三者の立場からは、まことに面白い観物であつたが従業員の私にとつては、伊エ開戦以上の大問題であつた。――

日給を半額にする承知せよ
争議團來る、社長の腰勤く
委員長謀議の洩れるのを嘆き
運轉手帳を恐れぬ免許證
缺勤の名義ではいるストライキ
ガレーヂを守る法被の兄貴連
持久戦くるまの中の蚊取香

川柳のたね 其二

青木史呂

少年の日のなつかしい思出に覗からくりと云ふのがありましたね、蜻蛉眼玉のレンズをはめて新浮世風呂の嘘のないところを御覽に入れませう。

題しまして、萩の茶屋デッサン。

× 大衆食堂であります。

所謂めしやさんが看板變へをした處です、間口一杯にあるイミテーシヨンウキンドが違ふ位なものでせうか、およそ食慾をそゝるに足る窓を覗き込んでゐるのは、決してお客ばかりではありません、ルンペンだつて瘦犬だつて、萩はひもじくなりませう。

× 萩の茶屋とは、そんなことです。

× 喫茶店があります。

いゝえ、こゝでは純喫茶と仰有つて下さい
お客様はみんな紳士です、紳士は時折、地下足袋を穿いていらつしやいます。

× 萩の茶屋とは、そんなことです。

× 喫茶兼酒場があります。

うつかりミルクとトースパンを御註文なさ

いますな、サービスが御座いませぬ。

× サービスとは、

女の子がお膝の上へくることだそうですね。

× 萩の茶屋とは、そんなことです。

× カフエーがあります。

ネオンと云ふものが電燈料を無視して頻りに利用されてきました、赤い灯、青い灯とは即ち代名詞なのでして、入口に近く至極一般の眼を惹く處に一枚の廣告ビラが貼られてゐるんです。

× 曰く、女ボーイ募集!

× 萩の茶屋とは、そんなことです。

× 活動寫眞館があります。

矢張り一週間に變ります、嬉しいことにその都度チンドン屋さんか賑やかに知らせに廻つてくれます、お子達のお好きな御方はどうぞ日曜日にいらつしやいせせ、何にしる入場料も午前十一時迄は、大人七錢、小人は三錢に勉強致します。

× 萩の茶屋とは、こんなことです。

(一〇、九、一〇)



柳川二十日會にはさなだでも
出席出来ませ、毎月二十日の
午後から夜にかけて不朽湖、
南極園玉置園西三丁キング喫
茶店一で路郎主幹を中心に出
る會です、會費の定めはあり
ません。

折よく與三郎君に逢へたので
これから二十日會へ行かうぢや
ないかと相談一決、キングの扉
を拂して驚いた、縁雨さんがゐ
らつしやる豆秋さんがゐらつし
やる機見女さまのお顔もあり、
汀柳さんが珍しく奥様御同伴、
加ふるにキングの新顔春光兄等
久々に愉快な廿日會が出来て嬉
しい、例により私には映畫以外
の話題を持合せないで早速春光
兄さんを捉へる、暇がない、
と云ひ乍ら、それでゐて松竹座
の事は先刻御存知な樂天家だ、
目下白谷タクシーの爭議に「わ
て第一線に立つてまんねん」と
自分で仰言るから間違ひはない

にしても甚だ以て心強い限りで
はある、だからこれからは大い
に句會に引つ張り出すとしやう
世間音氏が見えた、路郎先生
がお歸りになる、これで役者は
全部揃つた、愈々二十日會の開
幕だ舞臺は先生のオアシス孔子
園の書齋に移る。サア與三はん
あんたの出番だつせ。(史呂)
「秋はい、ね」と云ふ言葉の
内に、獨り居を樂しむ川柳家の
嬉しい境地がある。
室内の電燈に雨の葉雞頭が、
眞赤に浮きだされて美しい。社
務に疲れた先生が、この孔子園
の書齋でちろりを抱いて慘み出
される川柳こそ、僕等が待ち兼

ねる玉吟でなければならぬ。
膝を抱けば思ひ出さるゝ過ぎ
し一年前の風水書を、庭に降る
秋の雨はいつしか哀しき草花の
咽びとなる。

秋の別れは殊更に侘びしい。

高知から來られた機見女さんが
高知に歸られるのに何の不思議
もないのに、人情は算盤の珠の
それではない。又上阪されると
云ふ御言葉に絶對の信頼をかけ
て送別會には思ひ切り酔ふて管
を巻たい與三郎ではある。(與
三郎)

初めての二十日會出席の私の
瞳に映じたもの——こゝのマダ
ム霞乃先生の顔が三年前に千歳
俱樂部でお會ひした時よりは却
つて三つ程お若く見えたのにな
よいと度臆を抜かれ路郎先生の
顔は、こゝでは成程「おつさん
と云はれマツチを擦つてやり」
だわいと思ひ、純子さんのお顔
がも少し瘦せたら凄美人にな

る、といつて奈々子さんのやう
に奇麗過ぎると刃物のやうで近
より難く、アト君の小さなタ
イラント振りを見てゐると僕の
少年時代を思ひ出して、思はず
抱き上げたくなつたりして、兎
に角嬉しく、驟までお見送り下
さつて電車が動き出した時など
はハンカチを振るなどは手後れ
だとばかり、心からなる投げキ
ツスを捧げたのでありました。
あまり昂奮して、歸りの「ま
ん朝」で飲み過ぎた記事などは
此際蛇足になりますから、省略
することに致します。(春光)
二十日會はい、いつも僕は
路郎師と會つて慈父のめぐみを
受けてゐるがどこかに片親の様
な感じがのこる。ところがこゝ
へくると霞乃奥様に逢へる、わ
れらの母さまの懐に飯つた嬉し
さに包まれる。そして両親の亡
い僕はつい酔はらつてこの母さ
まにわがま、氣まゝを云つて了
ふ。
(汀柳)

桑山清美君を悼む

生 田 翠 夢

御旅吟社の花形作家、清美君は二ヶ月に渉る療養の甲斐もなく、九月九日丁度重陽の節の朝、遂ひに廿五の春秋に富むうら若き、を秋吹く風の朝露の如く、儚なく散つて仕舞つた。

殊に一人息子であつた事は、父君にとつては堪えがたい痛手で、痛ましいとも悲しいとも、御弔みの言葉もない。

君の川柳に手を染めたのは、昭和八年の秋からであるが、群を抜いて素晴らしい上達を示めし、題吟に雑吟に、行くとして可ならざる事はなく、何づれは川柳雑誌社の同人として活躍を期待され、亦君もその覚悟であつた事は、本吟社のみならず、本社の一勢力を削がれた感を深くする。

丁度九月號の本誌が届いたときは、君が永久の眠りについて後であつて、病床でまぢこがれてゐたのに、間に合はなつた事は、淋しかつた、で納棺のとき「みつる」が持つて行つた、本誌を、片手に握ぎらした、最後の旅を本誌と共に悠々と、彼は歩んでゆく事であら

う。そうして天國であのニコヤカナ姿で、しきりに作句を続けるであらう。

一片の煙と化して秋の月

江 戸 み つ る

オーイ、と呼べば右手を揚げて ヨウーと返事する君。肩打てばニッコリ笑ふ君。噫 空し 今は地下に眠り賜ふ 清美君。

眞淨院觀月日秀居士

桑山 富雄



行年二十五歳
昭和十年九月九日没

僕等三人で四月に商賣を始めて未だ六ヶ月漸く此の頃儲つて来た時、こんなに君が早く亡くなるとは思はなかつたです。僕等の落膽痛手それを云ひあらはす言葉さへ見出し得ぬ傷心は、君は天國で知つてゐて呉れるであらう。清美君三辰洋行は二辰洋行となつたが決して三振はせず、君に變りて必ずホームランをブツ飛す可く努力致しますよ。

呼べど呼べどたゞ幻のあるばかり
この一句を捧げて心から願福をお祈り致します。(九月十九日夜)

近 藤 勇

清美君の死！ほんとうですかと問れる程に君は若く純情なるヤングセントルマンであつた、且又君の友情に厚き事はとうてい一片の筆には表す事が出来ない君と一度交際すれば皆永久の親友となる決の上に非常に多趣味あつた、それだけに君はあらゆる方面の交友を持つてゐる一度君の悲報が傳るや川柳の友野球の友スキーの友将棋の友と多方面の若人が參集した集る人達は皆趣味こそ違え君の友情には目頭を厚くしてゐた、此の幾多の思出を残し君はうら若き二十五歳の秋を最後に歸らぬ永遠の寝りについてしまつた。噫！今は只君の冥福を祈るのみ 合掌

あまりには思出多く君は逝く

清美 抜句集

マネキンは腰に好奇の目を受けて
伊達巻へざれついで三毛脱まれる
首だけが繪になつてゐるキリンなり
王手飛車膝を叩かんばかりなり
冷えすぎたコーヒへ氣まづく別れて
ふと見れば俺にからんだ眼あり
日曜を働いてゐる果報者
たしなみを忘れた顔でふくれてる



一路集

暮集句

姫田夕鐘 共選
竹内機見女

火鉢

○ 夕鐘 選

利己主義を一人が唾ふ大火鉢 崙喜固藪
 長火鉢ひよんな所を見せられる 非常兒
 こゝろ寂しく火鉢にこもる秋の風 久米雄
 金火鉢疊の下で夏を越し 花鳥
 叱られて火鉢へ遠くかしこまり 都會人
 唯一つ形見の火鉢のある生活 獨歩
 火鉢から散つて師匠は迎へられ 頓智木
 お火鉢へ手相の話持ち出され 君女
 まとまらぬ話火鉢へ炭をつぎ 靜波
 お値段は火鉢二三度撫でゝから 翠陽
 年頃のいつか火鉢へよる思案 いさむ

なづまれぬ心火鉢のふちを撫で 蘇堂
 ふるさとの火鉢に獅子がこいてきた 彩泡
 酔はされた妓の降る来る長火鉢 秃山
 何はさて火鉢の側へ寄り給へ 柳夢
 留守ごとの匂ひが残る長火鉢 菊路
 御燈明のうつる火鉢へ三味を持ち 双亭
 長火鉢女は愚痴に生れつき 徳三
 行商の聲は火鉢で断られ 文庫
 渡し舟火鉢の灰が疲れてる 三代吉
 懸引は火鉢なでゝ吃る辯 同
 小遣ひを火鉢のまへに投げてゐ 觀月
 ちれつたい話になつた長火鉢 同
 店火鉢女大出身無表情 世間音
 拭き込めた火鉢へ屑屋世辭を云ひ 同

川柳家戸籍調 (續)

(係) 綠 雨

- (1) 姓名 (2) 雅號及別號 (3) 生年月日
- (4) 出生地 (5) 現住所 (6) 職業又は勤務
- 先 (7) 好きな句 (8) 自信の句 (9) 川柳以
- 外の趣味 (10) 配偶者子供の有無 (11) 嫌ひ
- なもの (16) 川柳に手を染めた年月

(十五)

西 いわを

- (1) 西岩雄、(2) 西いわを、(3) 明治三十
- 七年一月十五日、(4) 和歌山縣西牟婁郡瀬
- 戸鉛山村(5) 大阪市住吉區濱口町二九二番
- 地、(6) 會社員大阪四ツ橋南日本樂器會社
- (7) げに春の静けきものに軒の幕(劍花坊)
- 看板の裏で茄子の花が咲き(豆秋)、(8) 坐
- 折しさうだ燈明を上げよ、(9) 音楽、(10)
- 有り、一女、一男、(11) 欺くこと、みえ空
- いた虚言、(12) 昭和五年十月頃、會社内で
- 御池橋支部設立、昭和九年十一月川柳雜誌
- 社同人となる、現在支部幹事。

(十七)

堀 鳥歌

- (1) 堀重雄、(2) 鳥歌、(3) 明治三十九年
- 三月十九日、(4) 大阪市天王寺區生玉前町
- (5) 大阪市東成區北生野町一ノ一九、(6)
- 大阪中央電信局、(7) これ小判たつた一晚
- みて呉れる、(8) 集金は持つて生れた業で
- なし、(10) 有、女一、(11) 關西人の東京
- 辯、(12) 大正十三年八月。

(佳吟)

火鉢拭きながら母から諭される

龍 鳳

長火鉢あるじは何時も膝を立て

構想をまとめて夜の長火鉢

足が出る手が出る事務所火鉢

決断のぶく火鉢の底をつき

股火鉢夜店の夜が更けてくる

しみんと指の太さを見る火鉢

支那火鉢園み紛議の夜が更ける

泊つては来ない火鉢へ粉炭つぐ

しみんと指の太さを見る火鉢

瀬戸火鉢だいて望みは大きすぎ

大老舖昔のまゝの大火鉢

暴君へ哀れ火鉢は手負なり

いさむ

宣徳の火鉢は語る成り上り

忠 司

着想がつかぬ火鉢の火をくずし

日ノ丸

宣徳へまだ働らせる手を焙り

葉 光

機見女選

仲裁は火鉢の灰を搔廻し

吸がらの煙草さまゝ店火鉢

行末を語る夫婦へ炭がはね

徳 三

お火鉢へ手相の話持ち出され

身代の多寡は宣徳火鉢知る

まとまらぬ話火鉢へ炭をつぎ

柳 夢

箱火鉢明治の艶を光らせる

同 童

置手紙火鉢昨日の姿なり

同 童

商誠のひそかに火底みつめられ

同 童

長火鉢こゝはあたしの座るとこ

同 童

云ひ難いところは火鉢なで廻し

同 童

夏火鉢愛の消えたる炭ひとつ

同 童

針仕事火鉢を遠く縫ふてゐる

同 童

(注)

- (1) 加藤利一、(2) ライト、(3) 明治三十八年七月五日、(4) 大阪市浪速区難波小田町、(5) 同 大正区鶴濱通一丁目ノ二、(6) 大阪市電気局電車掌 鶴町事務所詰 (7) 市松人形どの男にも惚れて居ず、(8) まだ有りません、(9) 観劇、魚釣り、川味線、等、(10) 妻子有り、(11) 禮儀をわきまへぬ人、蛇、蛭、等、(12) 昭和六年九月始めて川柳雑誌社鶴町支部妹尾變人君のすゝめにより鶴町句會にて作句。

(注)

- (1) 山本佐一、(2) 佐一郎、葉光、陽光、(3) 明治四十二年十月十日(九月九日)誕生(4) 大阪市南区天王寺稚寺町(天王寺西門前)、(5) 同天王寺區俗人町八四、(6) たつて云へば病床六尺、(7) 其の日暮らしも軒に雀がこぼるゝよ(路郎)、呑んで欲し止めても欲しい酒をつぎ(霞乃)、(8) 非常時の空へ待期の池の鶴、駈引を大阪の孫心得る、青春を病める枕に夢の数、(9) 讀書ラヂオ聴取、短い文學、(10) 甘たるい食物牡蠣、ナマコ、洋食の調味料、菊菜、人参葉、(11) 尋常一年生二學期と三年生二學期のみで幼時の打撲傷で病む、昭和五年七月二十一日父死去す、川柳雑誌の昭和六年一月號にて路郎先生より「葉光」を名附もらひ、二月號より句が發表される。

一
集 路
寺

福田山雨樓選

寺葬にゆがんだ卒塔婆なほさまも 葉光 山門の埃り特別保護を受け 翠陽

代參は勿體ぶつて寺に来る 文庫 紙芝居寺の木影に集めてゐ 靜波

キャンピング一夜を寺の蚊くさばに 祥月 スイツチを押せば本堂百燭光 いわを

本堂へ和尚が小さい阿彌陀經 崙喜固藹 本堂の疊冷たい遺族席 としを

寺町の暗さ嬉しい二人なり 都會人 時の人寺で暮した過去を持ち 沐天

寺男耳の遠い世辭を言ひ 四塊 寺の鐘ゴーンと京の街灯り 世間音

山僧の雑巾がけもして不惑 梢雨 おかしげな程尼寺の世話をやき 同

寺の鐘昔のまゝに聞く母家 獨歩 寺の庫裡大きな犬の耳が垂れ 水客

風水禍寺は遠慮の儘の屋根 三代吉 枇杷の葉の重たき寺の陽の眞下 同

住職も尻をからげて拭掃除 花鳥 本堂は座禪納所は味噌の香や 徳三

山寺は干魚の味も知つてゐる 晴三 脛長き見物が来る寺の庭 同

噴水と鶴とならんだ寺の庭 白峯 (五客)

山門で會ふた女の氣にかゝり 清一 蟬の殻踏めば音する晝の寺 双亭

働ける街を見下し寺靜か 忠司 寺に又看板一つふえるなり 曉童

壁落ちた小さな寺の庭の秋の いの助 本山の暑中見舞も有難し 白峯

説教の歸りは孫の無理を聞き 蘇堂 高野山赤いふとんを着せてくれ 豆秋

お寺から相場のラヂオ漏れても 青兒 大伽藍賽銭函は行き届き 不二號

末の子も嫁を貰ふた寺詣り 觀月 (人)ひつもと寺の梵妻座りダコ 禿山

初戀に破れた男寺を借り 禿山 (評) 盛夏でも何處からとなくひんやりと

お寺ではおさまり兼ねる水喧嘩 菊路 した風の吹く僧房の一室に、つゝましや

か梵妻の色の白い姿が浮ぶ。類句がなかつた。そしてこの句を通じて、人間味に徹した作者の微笑を感ずる。

(地)植木屋に貧乏寺と見られたり 豆秋

(評) 植木屋の眼を通じて作者の冷徹な川柳をものしてゐる。「貧乏寺」なんて着想は仲々眞似が出来ない。しかもこの句はユーモアを湛へてゐる。何にも知らないやうな顔をして、何でも知つてゐる豆秋氏の哲味ある佳作だと思ふ。

(天)寺町の夜氣ひんやりわんたん屋 彩 泡

(評) 靜寂な夜更の寺町を流す「わんたん屋」の笛には哀調がこもつてゐる。しかしこの句はさう云ふセンチメンタルを脱つたものではなく、寺町といふ有閑地帯と其の日暮しのわんたん屋との配合に川柳を見出したのである。自然實相の表現に重きをおく俳人には捉へ難い人事實相であり、常の廣い句境である。

お願ひ

全國の新聞柳壇の調査を致してゐますので、皆様の地方新聞、御關係新聞を一部御惠送下さる様お願ひ申上ます。

事務所内 汀柳

各地柳壇

いちのあを創るれ



路郎・汀柳・紳樂・整理

投稿清規

- 一、用紙はなるべく原稿用紙のこと
- 二、文字正確明瞭に記載のこと
- 三、開催月日及場所記入のこと
- 四、締切は毎月末日とす
- 五、投稿先は本社事務所

柳翁忌

九月二十二日

於日本橋俱樂部

秋ふかみゆく今宵、百四十六回の柳翁忌を迎えて肅然と降る秋雨の中を、初代柳翁の偉業を偲びて、集る柳友六十餘名。

BKから放送される主幹路郎師の「川柳の笑ひと涙」の川柳記念講演を會場内にラヂオを急設し句作の手をとめて聞く。

作句締切後森東魚氏演壇に立たれ、「柳書に就いて」の演題のもとに川柳古書に關する蘊蓄の一端を述べられ、BKより早速歸られた路郎師の「柳翁を偲びて」と云ふ講演あり、續いて席題の披露に移る。

各地柳壇

後授の大阪朝報社より朝報賞の寄贈を受け路郎カツパは「町内」の天位正光氏、朝報賞は

汀柳氏選の「小唄」の天位與三郎氏へ授與された。(與)出席者

路郎師、汀柳、雨迷、雨舟、夢裡、都會人、鯛市、魚嵐、與三郎、煙柳、琴泉、世間音、鮎美、遊歩、翠陽、美津生、靜波、紳樂、青兒、牧人、天國、白菊、蝶の助、柳笑、不角、つと夢、豆秋、綠雨、友帆、徳三、雞牛子、史呂、みつる、機見女、帆夢、正光、源坊、春光、柳狂、文蝶、仁昭、東魚、滿潮、勇、春光、努輪句、亂蝶、彩池、い、わを、かほる、魚水、昇鯉、破竹、良祐、三吉、精作、雀踊子

席題 ニュース 互選 紳樂披露

ニューズヴリデイ絵に泣いてる人もある、故郷の大火ニューズあつさり片付る 琴泉

歸り道とぎれ／＼に聞くニュース戦争をせよとニュースをかこんでる橋筋でニュースを拾ふ 午前二時 ニュースちと慌てたらしい違ひやうムツソリニの右手がぬぐるニュースなり文壇のニュースを掴む 婦人記者 凶作のニュース聞く夜の流れ 星角 寝轉んで聞く非常時のエチオピア 世間音 月曜日罰金のいるニュースあり 蝶の助 重役のニュースを固くなつて 聴き 牧人 ニュースの時間へ疲れた父が 柳笑 ニュースの時間を母に止められる 同

席題 覺悟 鮎美選

覺悟して来た商人のうまい口 いわを いちらしい覺悟へ父が泣くばかり 柳笑

各 地 柳 壇

類あせた冷たい覺悟とは知らず 雨 述
覺悟とは別に女はだまつて居 縁 雨
振り袖が二つ覺悟の肩に垂れ かほる
覺悟した女と弱い男とみ 春 秋
兩方に覺悟が出来て納まらず 牧 人
覺悟して来た大阪に別れてみ 琴 泉
も、辭める覺悟云ひたい事も 静 波
助らぬ覺悟も一度醫者を呼び 同 人
(人)秋の水覺悟の色に澄みわたり 青 兒
(地)自動車の中で覺悟をした女 正 光
(天)バラシニューター死ぬ覺悟(なまぬ)なり 史 呂
(軸)首の座に一句を残す日 本人 鮎 美

席題 柿

雨 迷 選

柿をむく女と話まとまらず 友 帆
出戻りの淋しく柿の色と座す 雀 踊 子
柿の色つくつく秋を語る色 東 魚
禪寺のひとこ明い柿の枝 角 嵐
話題はつきず女が柿をむく 破 竹
串柿へ母が慈愛の爪のあと 翠 陽
柿一つ秋空へふるへてる 雨 舟
美しき柿のいろ艶ほゝにあて 汀 柳
とんぼ釣りの竿をおそれる寺の 春 光
皮むいた柿を吊して障子の日 春 秋
秋暮れて梢の柿は忘れられ 都 會 人
テールルの柿に密談灯が更ける 亂 耽
生活の不安が去つて柿の艶 同
(人)酔ふて戻つてみまに柿が一つあり 艸 樂
(地)柿の木の家は母親獨りみる 春 秋
(天)物乞ひの帽子の底に柿ひとつ 都 會 人

席題 男

艸 樂 選

或る日女給男だつたらナと思ひ 牧 人
どなられて男としての意地もあり 鯛 市
男の子血の出るところへ砂をつけ 豆 秋
男と生れ丙種を淋しがり 仁 昭
秋の夜男の影が重なりぬ 鮎 美
滿洲へ行く氣男の借り歩き 文 蝶
頼母しく障子を破る男の子 不 角
長男の無口を父は齒がゆがり 滿 柳
蟻のごと働く男うらやみぬ 汀 柳
男だのと無理な相談引受る 柳 狂
赤心一票男の價値を知る日なり 蝶 助
六尺のまわし男の誇り知る 魚 水
たよられて男一匹持て餘し 昇 鯉
少女から男の嘘をさげすまれ 德 三
御近所で男にされて閑がなし 同
泣くまゝと泣くまゝとする男の子 春 秋
母とみて女のやうな男の子 同 嵐
(佳)おとこ氣の一筋錢がいるばかり 天 國
(同)夜の底男も恐い男居る 世 開 音
(同)裏切つた男へ仲のよさを見せ 精 作
(同)泣く部屋が何處にもない男なり 昇 鯉
(同)整つた男世帯をはめられる 昇 鯉

席題 馬

翠 夢 選

君が代が響くと白馬神々し 燕 柳
馬一匹家内五人がたより切り 勇
負競馬帯がゆるんで歸つて來 文 蝶
クレーンに吊られた馬の眼が細い 蝶 助
萬を越す馬の値段を淋しがり 正 光
馬と人月と歩いて歸るなり 鮎 美

馬を挽く男電池を持つてゐる 幸 捐
三着がヒ、ンと嘶いて腹が立ち 蝶 助
荷を下ろす馬へ子守は兒をあやし 昇 鯉
御神馬はつまらなさうに豆を喰ひ 牧 人
馬方も馬も無産黨よく豫ぎ 琴 泉
一着の馬券は汗を吸ふてゐる 同
金策の顔と並んだ馬の顔 春 光
馬の尾が揺れてお渡御了りなり 同
(人)奉公の身は坊つちやんの馬に 春 秋
(地)穴馬の汗は皆んなに忘れられ 滿 潮
(天)馬の趣味女としての紅をつけ 破 竹

席題 國勢調査

雞 牛 選

午前〇時まで起きて長男筆を取り 友 帆
國調の仲よく並ぶ君と僕 春 光
おむつくとつて國勢調査員來る 角 嵐
國調へ並ぶ男の子の名前つと夢 破 竹
宵寝して國勢調査恙なし 破 竹
漸くに一軒持つた申告書 史 呂
國勢調査亡き子の歳を數へさせ 汀 柳
國勢調査息子は支那へ行つたきり 滿 潮
(佳)國調を濟まして菊に水をやり 蝶 助
(同)國勢調査母の淋しい年に觸れ 蝶 助

席題 水害

亂 耽 選

水害の土堀に雀の囀りて 鮎 美
水害の村泥水へ灯つてゐ 春 秋
水害の便り金には觸れてなし 精 作
水害に飄然とくる無帽主義 雞 牛 子
浮くものは皆んな流れて水が引き 友 帆
水害地ばやいて見ても雨が降り 蝶 助
水害の簞笥がいつそ愚痴になり 破 竹

各 地 柳 壇

半日も降ると芦屋を脅かし正光
 水害の調査は丘の上ですみ牧人
 水害の子が天気圖をよく覚え徳三
 水害の想ひ出開かぬ小袖を出し同
 水害のかふ言ふ時の眞ッ裸角嵐
 水害地魚籠など持つた人と逢ひ同

座題 全 快 正 光 選

やせたよと云つて全快嬉しさう東魚
 全快にコップの水が胃に泌み天國
 全快の坐り姿が小さすぎ春秋
 全快にちとのびた鬢置いてみる緑雨
 全快の少し歩いて露を踏み艸樂
 全快の昆布茶をすゝる青疊鮎美
 全快へ家政婦残り惜しく歸り徳三
 全快を小僧しゅみん恩に着る角嵐
 全快の目の前におくインキ壺亂耽
 全快は端書十枚買ふて見る琴泉
 全快は天井は低し全快祝はれる鮎美
 (同)全快は海苔の匂ひをなつかしみ雞牛子
 (同)全快のうれしき足のまゝならず汀柳
 (同)鼻筋をはつきり見せて全快し雞牛子
 (同)日當りに髪梳いてみる床拂ひ精作
 (同)床上げの後へ良薬届けられ同
 (地)全快をしらせるハガキ五六枚亂耽
 (天)洋服を着て全快の道白し鮎美

座題 小 唄 汀 柳 選

勝太郎辞表を出しただけのこと正光
 宵淺く戀慕小唄となる心亂耽
 小唄から粹な男にされてみる徳三

小唄の文句そゝまゝ寄す妓のレター
 悲しさを包む小唄が低く成り柳笑
 裾踏んで小唄うたへる男なり天國
 (佳)小唄一つ呑めぬ口でもなさそうを艸樂
 (同)訛又小唄師匠の癖に障え與三郎
 (同)支配人小唄へ廻る用があり翠夢
 (人)小唄だけ唄つて名妓部屋を出る魚木
 (地)小唄より憎らしい程のすそさばき翠夢
 (天)角帯の膝ほほどけた小唄本與三郎

兼題 町 内 路 郎 選

目と鼻へ住んで居ながら妻に聞き美津生
 町内の話題未だに水の事亂耽
 火を出した元の町内避けて行きつと夢
 町内は年寄りの云ふ事が勝ち春秋
 町内にもあつて町内とはあはず艸樂
 百萬圓もあつて町内とはあはず都會人
 町内がもめて一日無駄にされみつる
 町内のお地藏さんを買ひに行き豆秋
 町内は静かあいまい宿が出来燕柳
 町内はビルの並内でもちと淋し琴泉
 町内にベルが並んで灯を倒せ角嵐
 町内の團結デパートを倒せ世間音
 一日一善町内の長を掃く汀柳
 町内であつちまづしい子澤山
 町内の拔露路を知る紙芝居徳三
 町内のすげな前科いつか知れ同
 町内の除けもので二つ出来正光
 選挙から町内會が二つ出来天國
 (人)町内に徽章をくばり晴れを待つ源坊
 (地)門構え町内の子と遊ばせず源坊

(天)だしぬけに死んで町内寒がらせ正光

柳 珍 堂 忌

於本社事務所
 九月十四日
 關西川柳界の先進松村柳珍堂の十七回忌を
 修した。故人の令息松村旭氏の挨拶、川上日
 車氏と路郎主幹の故人を偲ぶ講話があつた。

出席者 路郎師、日車、旭、史呂、汀柳、
 與三郎、世間音、蝶の助、三巴、綠雨、艸
 樂、角嵐、源太、豆秋、雨逢、錢茶、麥郎
 都會人、鯛市、柳狂、

座題 茶 碗 互 選 夫 呂 披 講

支那手品日本の茶碗二つ持ち角嵐
 鯛焼いて茶碗を叩く子を叱り三巴
 茶碗の音に段梯子降りて来る綠雨
 茶碗酒悟つた様な口をきき錢茶
 不機嫌をお茶碗洗ふ音に見せ豆秋
 茶碗の音させてもういふ歸らせない
 二人きりの茶碗も嬉しいうきん取る艸樂
 茶碗の大きさに家族の地位があり蝶の助
 六兵衛の茶碗おかつの叱事言ふ同
 母親の疲れは茶碗の音にさせ與三郎
 朝々の茶碗の丸みに感謝する同
 お變りと茶碗つき出す手が黒い史呂
 夫唱婦隨茶碗はかけた儘もよし同
 食ふ時に茶碗を洗ふ獨りもよし同

座題 童 童 三 巴 選

童謡に淋しが語り子供逝く錢茶
 照れもせず酒に童謡頼母しい源太

各 地 柳 壇

童謡のひとゝ舌が廻らない 汀柳
童謡を作る男の泣きほくろ 角嵐
童謡に踊る子供の靴が鳴る 同
童謡で寝た子起さればマ、と云ふた 蝶の助
たがれを童謡にする子の世界 同
童謡のピアノの漏れる赤い屋根 世間音
童謡の教師三荷で嫁入し 同
抱かれてる童謡何度でもうたひ 豆秋
童謡はすむと樂屋へ走り込み 同
童謡の拍子で無理に歩かせる 同
童謡で紛らされぬ智恵が付き 同
仲よしのお手々つなげば歌になり 同
(軸)童謡の二節ひとりの聲になり 三巴

席題 散 歩 豆 秋 選

秋の野の散歩に蟲が逃げ廻り 史呂
散歩またきのふのところで立ち止り 角嵐
腕白をつれた散歩は小銭要り 鯛市
ステツキの先はネオンに向いてゐる 都會人
ステツキがいたづら好きな散歩道 紳樂
あてのない散歩とするや女たち 汀柳
散歩道そり身で犬に引つばられ 紳樂
軽るやかに舗道のヒール音たてる 紳樂
ステツキかに鋪道のを眺め 線雨

席題 舟 雨 迷 選

舟は今夕餉の支度煙立つ 錢茶
片舟に托して流す戀もよし 紳樂
舌打ちをして躓いた高瀬舟 蝶の助
渡し舟けふも平和な雨に暮れ 史呂
高瀬舟女房の力あなどれず 世間音
安治川を上る荷舟は飯を煮き 豆秋

満月に帆網のゆるい舟が行く 角嵐
舟板のこんなどころに蟹の泡 同
出帆に間もなしはなるゝ小舟の灯 源太
かき舟へ發動機船の波がある 同
朽ちた舟子供ほどよく濡れてゐる 同
(人)船足が重い故郷を遠く見る 鯛市
(地)とまり舟あるじは町へ行つた朝 汀柳
(天)警報におどろくと舟思ひきや 豆秋

席題 牛 乳 紳 樂 選

牛乳に馴れて病床春になり 錢茶
秋だなと思ふ牛乳あたたかい 源太
牛乳の塊はつめたし秋に入る 汀柳
牛乳屋テリヤの分も配達し 豆秋
牛乳をまだ續けてる病上り 線雨
牛乳は家計と別に病んでゐる 都會人
牛乳はずつとのんでる内氣な子 三巴
(人)牛乳を或る日の親が慍しくなり 蝶の助
(地)牛乳は死んでも飲まぬ母が病み 三巴
(天)牛乳を飲ませ希望は捨てゝみず 錢茶
(軸)牛乳だパンダが老人氣に入らず 紳樂

兼題 洋 傘 路 郎 選

洋傘は今日の豫報にちようどよし 葉光
終電に洋傘のひとつが立ち續け 源太
洋傘の濡りはつめたく手をつたひ 三巴
洋傘はいつも放さぬ藥賣り 汀柳
はたらきに行く長男の青い傘 角嵐
嫁付いてバラソルの色派手に見へ 世間音
東京で大阪で洋傘雨を吸ひ 紳樂
バラソルを乗せてボートの威勢よし 錢茶
秋流行は洋傘の柄を切りつめる 同

水害を見に来る知事のこうもり傘 豆秋
バラソルを股ではさんで錢を出し 同
郊外に住んで洋傘持ち馴れる 都會人
乗場までバラソルすこしはなれて来 同
洋傘も老衰の腕で共に老ひ 同
洋傘へ三人這入る俄か雨 史呂
ステツキになる洋傘と知らざるき 同
色衝を素見でない洋傘が抜け 同
(人)時計見る腕に洋傘ぶらさがり 與三郎
(地)洋傘の中から顔がつましく 雨迷
(天)洋傘を貸して呉れるに恐れ入り 三巴
(軸)さびしさは洋傘の影老ひの影 路郎

川 柳 光 耀 句 會 (大阪) 雜誌社

湯化粧へ聞くとはなしに鐘を聞き 葎乃選
姉の日へかたみの單衣着て行かん 同
氣短かへかくも單衣のりがきゝ 同
青雲に燃へつゝ國を出る單衣 同
單衣着てひさしづりなり松竹座 鮎美
嫂の單衣に茄子花ざかり 同
鐘叩きながら天六から消へる 同

兼題 鐘、單衣 葎 乃 選

こゝのどこ切つて良いかと示しに来 品子
面洗器鉢も用意して居るなり 公子
宿題の手工へもめて居る鉢 房子
亦たしても鉢の置き場叱られる 同
念おしても鉢を入れる手の若さ 機見女
手鉢の鈴が仔猫の首で鳴り 世間音
二女三女おもひ思ひに切る鉢 鮎美

各 地 柳 境

鉢もつ心はさびし 白布切る 同
樹かげ 葎乃 選

樹かげから幹事大きな口をきき、公子
養育を樹かげでじつと考へる 房 子

陽ざかりの樹かげの下の冷し餡 同
エゴイスト樹へ来ればシャツをぬぎ 機見女

悠久をおもふ樹かげはふりむかれ 同
ハイキング樹かげで鈴の音がとまり 世間音

公園の樹かげベンチは皆ふささぎ 同
樹かげ美しく・れ・みふあそらしど 鮎美

阪大川柳會例會

丸島利生報

兼題 轉 寢

路 郎 選

つまゝれたやうに轉寢目をこすり 千 秋
女も轉寢をやる姿勢なり 路 生

轉寢の子供邪げんに起される 同
どなられてみて轉寢のいゝ氣持 柳 秀

轉寢の足は暖簾に撫でられる 同
轉寢の妾デツサンくづれて 栗 女

轉寢の出来る呑氣をうらやまれ 君 女
轉寢を子供が寢ないせいに 同
轉寢のお腹の邊を兒がまたげ 同

下車驛を氣にかけてゐる 睡り様 浅 女
様轉寢へ五錢で賣ると書いては 同
お歸りを待つ轉寢は寢てしまひ 青 路

(人)轉寢の顔で往診とんで行き 青 路
(地)轉寢の夢はゴトンと落ちた夢 青 路

(天)轉寢をどこの阿呆か茶屋で 柳 秀
兼題 市 電 路 郎 選

警察の小使市電の隅に立ち 利 生
待たすだけ待たして市電二輛来る 同

三對四市電の窓でくやしがり 同
母親はゆれぬ市電にすると云ひ 同
五圓紙幣市電は剩錢が無いと云ひ 同

三越を出れば市電を越えて居り 同
赤電軍これから汽車へリレーなり 同
就職へ市電の地圖も書いてくれ 同

すき腹をかゝえ築港行を待ち 同
融通のきかぬ市電の扉をたゞき 同
エリガミをつかまへ相に車掌のせ 同

(人)父は市に勤めてゐるが車掌なり 同
(地)大阪の名所市電で教へられ 同
(天)車庫入りの市電は人を顧みず 同

アルプスがどうであらうと晝を寢る 路 生
溜息をついて亭主に叱られる 同
お互様などは妻の口が過ぎ 同

脳留守は一つ一つに世話がやけ 同
つまみ出すやうに蠱審アウトにし 同
泣いてゐる肩へ嬉し手はさはり 同

出迎への妻の手にあるトマト 同
柿の木はそのまゝにしてバス通ひ 同
(秀)肥たこの臭ひ故郷は健在か 同

兼題 職 人 路 郎 選

職人が社長になつて靴屋店 芳 一
ノイタイで鋸さげて御出勤 橙 舍
親子代々職人が自慢なり 同

職人はもつて生れたやうに云ひ 同
せめて伴だけはと大工強氣で 同
職人のかへればこんな家に住み 同

満洲の話職人きいてくる 同

頭梁の紋付で行く用が出来 柳 秀
職人の嫁にはをししい器量よし 同
職人の謝ることも早いなり 同

起き上る大工へ隠居の見舞なり 同
親方の睨み食事の早いこと 同
職人の戀腹掛をさぐるなり 同

子澤山よぶ着ても職人の肩でゆき 同
羽織をば着ても職人の肩でゆき 同
職人のやうに原稿書きなぐり 同

むだ口を云ひ、松の葉を落し 同
(人)熊公に座敷の酒が身につかず 同
(地)職人をして、昔を鼻にかけ 同

(天)職人の氣樂さ晝を庭で喰ひ 同
(轉)職人同士脚氣の足を見せ合うて 同
(同)職人の吹く尺八の天の川 同

(同)剃刀の一挺持つて旅に病み 同
(同)職人と見へぬマントへ身を包み 同
川 柳 玉造句會 (大阪)

七月二十二日 清水友帆報

兼題 海岸 着 艸 樂 選

丸播にちと派手すぎる海水着 艸 平
海水着乳房のあたり押へて来 白 柳 子
海水着見にくるだけの女連れ 友 帆

海水着裸になつてまでの見得 錢 茶
海水着オリエ、津阪のポーズなど 角 嵐
兼題 太 鼓 没 食 子 選

青年會の大鼓を借りにゆき 白 柳 子
潮流を押し切つて大鼓鳴つて 錢 茶

各 地 柳 壇

果大鼓みかんの皮にすべりかけ 満潮
打鳴らす太鼓へ旅の氣がまぎれ 柳笑

席題 墨

角 嵐 選

名人の墨たつふりと走り書き 柳笑
證文へ墨する手先ふるへてゐ 没食子
一筆で書く詩の墨の色 満潮
墨色に凝つて忙中閑があり 錢茶

席題 碑

白柳子 選

終風呂へ釋はづして来た女中 没食子
先日はどうも釋はづしてゐ 柳笑
足音へいそぐはづす碑がけ 鯛平
酒屋まで行く新妻の片碑 角 嵐 帆
表具屋の碑昔を思はせる 友 帆

席題 竹

柳笑 選

竹筒をふつて草鞋のつりを出し 白柳子
絶景へ来て竹の皮捨てたるなり 満潮
竹槍の切つ先にある冬の月 角 嵐
卒直に延びたい氣持竹を活け 錢茶
竹馬でもたれて見てる紙芝居 没食子
竹矢來董の丘のロケーション 角 嵐

席題 麥

茶 満潮 選

叔母さんは達者麥茶が冷へてゐる 友 帆
白粉を落し麥茶にほつとする 白柳子
釣べまた麥茶の罐に突當り 没食子
冷へ切つた麥茶へ胸が擴げられ 柳笑

席題 衝

突 五 選

衝突の現場へ巡查來合せ 友 帆
衝突の記事に小さい菩提心 角 嵐
衝突の小僧出過ぎた口を利く 満潮
衝突へ赤の他人が腹を立て 錢茶

角力吟

鏡臺を動して見る妻の留守 角 嵐
大望を抱く身と見えぬ優姿 友 帆

川柳行人會例會 (大阪)

於 街の茶寮

八月四日

兎山、史呂共選

兼題 濱寺

兎山、史呂共選

濱寺に情死があつた陽が上り 與三郎
濱寺の松の青さへ肺を病み 同
濱寺の人の出入に戀が切り出せず 春 彦
濱寺の戀は松原縫ふて行き 兎山
濱寺の歸りへ別なブランあり 史呂
兼題 バス

兼題 バス

與三郎、史呂共選

大阪を再認識のバスに乗り 春 光
停止線バス圓タクへ腹を立て 同
バス揺れて若い同志は 赤くなり 兎山
陽の當る方は避けとく 夏のバス 史呂
酔ふた客バス一杯に笑ふなり 與三郎
兼題 石 繪

兼題 石 繪

與三郎 選

石繪の小豆に決めた内祝 春 光
石繪で下手に洗つて兎を泣かせ 兎山
行水へ石繪が要る女の子 史呂
(輪)アパートに住んで石繪借りらる 與三郎

川柳雜誌社 柳社句會 (大阪)

於大鐵俱樂部

八月八日

九 天 選

兼題 冷 麥

於大鐵俱樂部

冷麥のもつれ具合が氣にかゝり 久米雄
冷麥で姉と別れた務めの身 水 客
冷麥残著の街へ立つ日なり 某人

奉公の身で太刀が好き 冷麥 久米雄
子の箸へ助太刀が来る 冷麥 久米雄
(軸)風鈴の音冷麥に二人きり 九天

兼題 素 顏

喜山 選

本當の素顔で眠るデスマスク 水 客
病床のママムの素顔あわれなり 天 秋
孝行なスターの素顔よく撮られ 同
ウエトレスの素顔へ淡い畫の月 天 風 子
非常線役者の素顔見つめられ 某 人
名優の素顔が何處となくやつれ 天 風 子
俳優の素顔紳士の列で寫り 秀 太 選

兼題 助 役

秀 太 選

終電車助役團扇を置いて起ち 久米雄
山の驛助役カンテラ下げてくる 柴 香
終列車送り助役は月をほめ 九 天
兼題 喝 采

兼題 喝 采

天 秋 選

素人の手品喝采なりやまぞ 秀 太
拍手喝采ワキ役の名も知らず 水 客
アーンコールまだ緞帳の下りきらず 水 客
喝采が樂屋まで来る昂奮 木 履
喝采の音ががすかな樂屋裏 水 客

兼題 仁王門

陽 幸 選

仁王門エロな落書ふと見つけ 天 秋
仁王門勉強しない子を諭し 天 風 子
仁王門鳩のさゝやき聞いて午後 九 天
仁王門國寶の奥をうかゞはせ 木 履

兼題 胃 險

天 風 子 選

SOS 碎ける波へ檻をとり 水 客
アルプスの山頂に立つ凄風 陽 幸
生か死かの一手碁石の音無氣味 九 天

席題 歸 省 披講 互選

歸省した當座は母とよく話し水客
さて誰が生きた死んだと歸省の夜 久米雄

川柳雜誌社
兼川第二支郎 高松句會 (鳥根)

八月八日 於 旅館南山樓

暑い宇寅の南山樓の涼風はまたとない好會
場です、兼川作家の浴衣がけの集合句三味
もまた樂し、縁之助さんの講演ありのち酒宴
を催し、涼味百%の夜でした。

兼題 波 好郎選、零 大朗選(好郎報)

意見されつゝも初夏の瞳へ窓の月 桑門
ちびた下 歌湖の波に浮き さわだ

さざ波にまろい乳房を任せみる 如意坊
太陽は波に戀して夏の艶 樗柿

落ちぶれて友の意見が身に泌みる 茂都子
やまいをかこつひとみに波の泡しる 朴泉

汗は零となり生活に灼けた顔 華村
母の意見は涙にある温情 綠之助

「さようなら」も言はず泪の一零 笑朗
意見聴くのに懐のあまりしろいこと 大朗

川柳 今治句會 (愛媛) 會我部宵明報

雜誌社 於 伊豫直互野著銀行

兼題 金 策 宵明選

各 地 柳 壇
(佳) 金策をするとは見へぬ自家用車 文樓
(人) 金策をする名人の女房なり 小樓
(地) 夕立に逢つて金策戻つて來 心府
(天) 金策が出来た戻りが唄になり 小樓

(軸) 金策は(ツト)ライトへ逃げぬなり 宵明

兼題 夏 やせ 小樓選
どりのこの瓶へ結局やせた夏 曉童
どりのこの眼鏡ばかりが光るなり 宵明

どりのこの晝寢の息が靜かなり 心府
どりのこのズボンにはらむ風があり 子樓

兼題 ベン 軸 曉童選
(佳) ベン軸が知つる戀も二度目なり 小樓
(同) 謝まつたとたんペン軸それで落ち 宵明

(同) 良い智慧が額にあてたペンへ出る 心府
(軸) ベン軸を妹貸してくれぬなり 曉童

紹介 心 府選
(人) 紹介所最を食ふたかともいはず 曉童
(地) 意氣込みを碎いてしまふ紹介所 文庫

(天) 紹介所自分の聲が變つてる 泊汀
川柳雜誌社 慰靈句會 (於伊豫野樓上)

今治支部 八月二十五日 會我部宵明報

過去一ヶ年吾等支部同人の大半は或は兄を
妹を失つた、小樓の祖父曉童の義兄宵明の妹
心府の兄がそれだ、今宵其の四つ子の靈を慰め
る可く四人で靜かな一夜を過した。

題 迎 火 宵明選
母むねの丘の縁に火をたいて 柳石
迎へ火へキチンと末の子も座り 曉童

迎へ火へ遠く踊る聲がする 小樓
迎へ火が消へて山からお月様 同心府

(軸) 迎へ火へ母の白髪の増すを見る 宵明
兼題 合 掌 心 府選

道境へ合掌をする事ばかり 文庫

合掌の心淨土は一筋に 柳石

合掌の願が多いひとり者 藤生
合掌の手に光明がさしてある 一茶庵

合掌へ奇蹟といふを信じてる 宵明
義兄遺児を思ひて

一列にならば七人掌を合せ 曉童
一列へきれいな雲がとんで行く 宵明

(佳) 苦勞した事は合掌を忘れぬ 宵明
(同) 盃を差し合ふた掌を合さんか 曉童

(同) 合掌は雨に成つたを聞き流し 同心府
(軸) ベットから母の合掌見てあたり 心府

赤とんぼ 互選
打水の娘にさからつた赤とんぼ 藤生
赤とんぼ海水服はぬれてゐる 曉童

トラツクの故障が長い 赤とんぼ 宵明
産 曉童選

産聲に此の世の風がどう吹かう 心府
産聲だやつと煙草へ火をつける 小樓

(人) 産聲へ亭主亭主の位置にある 宵明
(地) 産聲へ注ぐ視線へ犬の顔 柳石

(天) 産聲へ庭師は松を降りて來る 宵明
(軸) 十、八、二十一日次女路子出生 曉童

産聲やます、膝がねばならぬ 曉童
産聲へ座布團隅へ積まれたり 同心府

明珠居小集 (神戸)

九月一日 明珠報

ラヂオ、背中、明月 互選

修繕のラヂオ蒲團に乗せられる 幸捐
満洲を音を聞いてる夜のラヂオ 竹楓

妾宅のラヂオ、エンタツ笑はせる
強意見おしいラヂオがとめられる
團體車背中合せへ酒をつぎ
勤続の背中、三十年の事務
うれしくもぬくみをつつランドセル

明月の母のない子を連れて来る
インテレに踊り明月へのんでみる
寝轉ろんで見る明月に雲もなし
山の手二階へ港、今日の月
明月へそうかそうかと飲む話

川柳雜誌社 大地吟社句會 (鳥根)
兼題 怒

九月八日夜 於尼縁之助君 凡愚報

目に秘めた怒り鬪志を語る
怒つてもみたが矢張り金が無し
伊達巻きの儘で怒て出てしまひ
怒の中にほかに愛を見つたり
怒り押へてコスモスの花摘める
君を怒りをあふる酒ではなかりしに
「君怒るなよ女は弱きものぞ知れ
怒る程俺は正しいのだからうか
怒つてる弟へ姉は笑ひこけ
無口なる父の怒りへ無口なる

馬の背へ蝶の飛び交ふいゝ日和
秋肥ゆる馬の尻毛の艶をなで
鼻唄に朝を荷馬車の通りたり
馬の耳一直線に風を切り

更生の一手へ馬も買ひ求め
勝馬はいたわられながら胸を張り
コップ酒待間も馬は首をたれ
馬小屋のくちたる屋根は月あろく
馬小屋のしとねへこほろぎ秋を呼び
放れ馬人なく空は高かりき
馬洗ふ男鹿兒島小原節同
席題 背戸 大朗、好郎共選
日本海ひと目背戸で齒をみがき
物憂さに背戸の小川の友となる
言ひにくい話背戸ら聲をかけ
席題 頭痛 田鶴緒選
頭痛膏賣春街の朝の顔好郎
決心を聞けば頭痛がするといふ

第一回大阪朝報川柳會 (大阪)

九月十日 於川柳雜誌社事務所

四ツ橋の眞中池のやうに見え
四ツ橋の風は堀江へ新町へ
四ツ橋の隅を削つて句牌があり
兼題 色 街 路 郎 選
色街をひいて仲居の夜がながい
さあ呑めさ南地事務所の笛が鳴る
神様を信じてみませす廓の妓
兼題 選 舉 緑 雨 選
絶對に信じじた投票裏切れ
顔役に成らず選挙無事にすみ
兼題 秋 春 秋 選
酒を呑む夫婦が秋の窓を開け

モルヒネが切れ秋風にさらされる
桐一葉セツトのやうな家に住み
兼題 エチオピア 豆 秋 選
エチオピアの戀はラクダ上の月
尻押が多いと知つたエチオピア
兼題 エチオピア 蝶の助
握手の後で笛を吹きかほる

第一回大阪夕刊川柳會 (大阪)

九月十七日 於川柳雜誌社事務所

北濱に勤め御幣もかつがされ
北濱は元の裸にして戻し
北濱の空氣にあせた合トンビ
兼題 活字 雨 迷 選
憂鬱は活字になつたおのが作
三行の廣告活字のもつ世相
悲惨事を文選うたにして拾ひ
兼題 帶 汀 柳 選
帯解いたことを箱屋は知つてる
角帯に四十の愚痴があるもみ手
三男の帯の仕方が氣に入らず
兼題 果 物 紳 樂 選
果物が一つランチの巾をとり
果物の汁でかそぼく生きてみる
兼題 政黨 豆 秋 選
政黨にまだ順番を待つてゐる
政黨の影につき添ふ手は白し

本社十月句會

日時 十月八日(火曜)午後六時半

會場 川柳會館

(川柳雜誌社事務所階下ホール)

天王寺區上坊町一丁目五一 上本町四丁目バス停
留門へ字丁始めての四ツ辻より左に見えろ洋館

兼題 「庭」 三句

麻生路郎氏選

路郎 盃 兼題天位賞として授與
(出席者に限る)

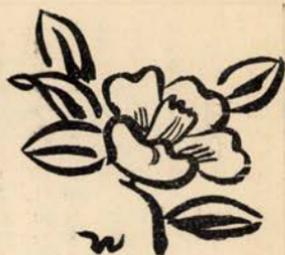
川柳マツチ 出席者全部に前田五健氏執筆
を呈上

會費 三十錢

主催 川柳雜誌社

川柳雜誌社關係十月句會案内

主 催	日 時	場 所	兼 題	會 費	雜	幹 事
御旅支部	夜七時	清水坊町	燈ノ明	不要	清美、追悼 句、短冊持 參の事	みつる
玉造支部	夜十三時	東雲町				女帆
御池橋部	夜十六時半	四ツ橋南	早 速	不要		いわを
大鐵支部	夜十時	クハラ	省 案	二十錢	川柳大會	九天
伯耆支部	後六時半	伯耆川柳	喧 嘩	不要	兼題投句前 日切	美 笑
伯耆支部	後六時半	美 笑	立 話	不要	右 同	美 笑
朝報社	夜七時	カメメ	三味線	二十錢	最高點及天 位に呈賞	與三郎
今治支部	上 旬	伊豫貯蓄	火消壺、孝	不要	兼題日切	宵 明
今治支部	下 旬	伊豫貯蓄	め反感、柘榴、爛ざ	不要	兼題日切	宵 明
市岡支部	夜二十六日	平光居	大 阪、誘 惑	二十錢	兼題日切	宵 明
高知支部	夜二十一日	中島町		十錢	兼題日切	春 水
高松吟社	夜七時	大朗居	魅 力、匙	二十錢	兼題日切	大 朗
十三支部	夜二十七時	十三東ノ 店二階	熱	十五錢	兼題日切	牧 人



柳界展望

全國川柳界のこと、各地川柳家の一舉一投足をこの展望欄ですぐわかる様にしたい。皆様の御通信を歓迎する。

【大阪】▲講談俱樂部十二月號募集十一月二月號發表の川柳選者として路郎主幹が擔當される。▲麻生路郎氏(本社)主幹は九月二十二日午後七時三十分よりの放送「川柳の夕」に「川柳の笑ひと涙」と題して講演をされた。▲山本雨迷君(本社總務)は大坂夕刊新聞に川柳閑話を九月十日より連載する。▲西田紳樂君(本社同人)は本社を代表して九月八日本社今治支部の二週年記念川柳大會に出席され、九日は松山十日會へ、十日は廣島新鐵道局の川柳家を訪問、宮島を見物して十一日を歸阪する。尙婦女世

界九、十月號に亘り「秋の七草に寄す」を執筆された。▲竹内機見女さん(光耀會幹事)は日本生命を退社され十月六日郷里高知へ歸られる事となつた。▲橋本綠雨、福田鶴峯の兩君は九月十三日大峯登山をされた。▲阪大川柳會は九月二十五日夜住吉の新明月樓に於て例會を催し路郎主幹が出席された。▲本社十三支部の十三川柳會が結成され九月二十八日夜その創立記念句會を十三東の町木村屋階上に催し、本社側より雨迷、紳樂、汀柳の三氏が出席した。▲淺野牧人君(十三支部幹事)は九月八、九、十日の大坂朝報に筆名正否論を執筆する。▲石森靜太君(螢ヶ池支部)は刀根山病院を九月一日に退院され四國遍路の旅に出られた。▲平田梢雨君は大坂東西區江戶堀下通一ノ四一旭商會へ轉居。▲本田溪花坊氏は大坂市北區川崎町五六へ轉居。▲増元榮世君(梅田支部)は翠陽と改號。▲理容新報に柳壇が新設されて創立句會は九月二十六日岸理髮店で催された。▲桑山清美君(御旅支部)は九月九日長逝された謹んで哀悼す。十四日の告別式には本社側より汀柳、翠夢、新水、みつる、勇の諸氏が參列した。

【東京】▲西島〇丸氏(川柳年表執筆)は十月一日川柳〇丸帳を發行され、川柳年表の補遺を掲載する。▲川柳雜誌東京支社は東京市蒲田區女塚町一三七に創設なし、福田山雨樓氏が支社長として就任する。▲「川柳人」は改題して發行するとの事であつたが、柳樟川柳會

では遂に廢刊に決定、今後雜誌は發刊せないと。

【兵庫】▲田島破鼓君は兵庫縣武庫郡精道村打出東口一ノ五矢野方へ轉居。

【鳥取】▲本社伯耆支部では加藤仰天氏の追善句會を九月十六日手間石山公園龍門寺に於て催された。

【島根】▲山根臯人君(松江支部)は東京より歸松、松江市役所に勤務され住所は松江市南寺町に移られた。▲本社畿川第二支部高松吟社の長月句會は十二日大朗居にて開催、▲加藤健芳君(畿川第二支部)は住友伸銅鋼管株式會社へ勤務された。

【神奈川】▲劍花坊句碑除幕式は九月八日午後一時より井上家の一周忌法要に次いで鎌倉建長寺に於て盛大に行はれた。▲「川柳よこはま」創刊號は横濱市中區中村町四ノ二七八横濱貿易川柳會より發行された。▲「川柳地帯」創刊號は横濱市中區境谷一四より發行された

【石川】▲關本一瀛君(加能川柳社)は金澤市橋場町一五へ轉居。

【高知】▲本社高知支部では九月十一日石森靜太君を迎へて懇談をされた。

【長野】▲石曾根民郎君(本社同人)の詞童謡の歌手山崎一郎さんはボリドール「かりかり渡れ」サトウ・ハチロー作詞を吹込十月新譜として九月二十二日發賣された。

【愛媛】▲原田一風君は九月二十日四國巡禮八十日に歸郷され本社今治支部の諸君が一夜一風君を圍んで柳談快談をされた。

【秋田】▲秋田川柳會報は秋田市四十間堀町二〇より發行されてゐる

【愛知】▲伊志田孝三郎君(名古屋は商用を兼ねて九月十日夜本社事務所での朝報句會に出席後、法善寺花月で東魚、梅子、雨迷、汀柳重次郎諸氏と快談された。

望 展 界 柳
訂 正
明治以後の川柳年表の筆者より左の項を發見されたので訂正する

「空つ風」大正五年十一月二十日第一號發行、同六年五月十日號で終刊。

「忍路」大正十四年十月十五日號で終刊。

社告

●本社支部幹事として左記の諸君が就任された。

松江支部 田中都之介

鎌川第二支部 後藤 大朗

新居濱支部 高橋 白羽

蟹ヶ池支部 米田まさる

今里支部 市場沒食子

十三支部 淺野 牧人

●本社十三支部十三川柳會を設置された。

●本社支部行人會は市岡支部と改稱された。

●川柳雜誌東京支社及支社長を左の通り設置された。

東京市蒲田區女塚町一三七

川柳雜誌東京支社

支社長 福田山雨樓

路郎盃保持者

本社句會の兼題、路郎師選の天位賞として贈呈して居る、榮與ある路郎盃保持者の記録を掲げてみる。正光君は二度の榮冠を抱かれたが十月句會第四回の榮冠は果して誰れが手に……。

血を分けてゐるおそろしき
膝へ来る

第二回(七月) 塚越 正光君

お互ひに避暑に行けない生ビール

第三回(九月) 塚越 正光君

だしぬけに死んで町内寒がらせ

記録

第一回(六月) 川村 觀月君 第四回(十月) ?

寫眞

出張撮影は遠近に抱らずお電話を下されば直ちに參上いたします

本誌表紙の麻生路郎先生の御寫眞を撮らして頂く光榮に浴してみますので、川柳の皆様には謝恩の意味で特におつとめをいたします。

大阪市東區谷町四丁目東市民館横

川柳雜誌社指定

キタムラ寫眞場

電話(東)一七七〇番

編輯の窓

汀柳

に話題を興へるもの、雨迷、丹路兩氏の清新な一頁ものも味はつて讀むべき好文である。

▼今月の月評は路郎師寓居孔子園を借りて催したところ、近頃にな

面やつれをされた感じが見うけられるが、忙しさに負けない先生の意氣と元氣は眉宇に漲つてゐる。

竹内機見女氏送別會

日時 十月四日午後六時

場所 紅 瞰 光 (階上)

電話南一八六番

市電戎橋停留所西の辻東北角

—會費一圓五十錢—

機見女さんが郷里高知へ歸られることとなりましたので、一夜お別れの集ひを催します、奮つて御出席を願ひます。

川柳雜誌社有志

(發起人 路郎、綠雨、汀柳)

▼表紙寫眞は本社事務所の階上で撮

▼別項の通り本社關係句會の案内欄を新設した、十一月の句會は本月中旬迄に決定して本社へ報告して頂く様お願ひする。

▼日本名所名物川柳及び明治以後の川柳年表の二頁分は紙面の都合で次號へ割愛したので、御諒承をお願ひして置く。

▼十月二十九日より四日間、明治神宮卓球競技大會の役員として雨迷君と僕が東上することになつてゐる。卓球の會場は飯倉町の麻生校で、旅館は呉服橋の龍名館の豫定、毎日夕方よりは卓球の方がお役御免になるので今度こそは東都の皆様親しくお目にかゝりたいと願ひしてゐる。

▼空の澄んでゐるやうに吾々の五感も澄んで、しんみりと句作三昧境に浸れる本格的の秋となつた。本號の編輯もこの好季節に際して全力を傾注した、新活字採用も二度目となつたので體裁に膺心する餘裕が出来た、そしてあと二ヶ月に迫る昭和十一年新春號の計劃に早や着手する進捗ぶりである。

▼わが社が先年東京句會を催してよりの懸案であつた川柳雜誌東京支社の設置は、別項發表の通り愈々實現された。曩に名編輯長として聲望厚き福田山雨樓氏が支社長を就任され、支社は東都柳壇の逸材高須啞三味氏居に置かれたので、この名コンビによる支社の活躍は充分に期待

されて聞 違はない 切に關東 方面の諸 氏の御援助をお願ひして快 まない。

▼路郎主 幹は過勞 の爲め數 日病臥さ れたが、 押して出 社、身體 が幾つあつても足りない多忙の中にも「僕の手帖」を執筆され 巻頭を飾つて頂いた。

▼山雨樓氏の久潤の論陣は柳界

つたもの、僕の向い側の机は先生の座られるところ、愛用のバットはいつでも机上に置かれてゐる、この頃の激務で少し

投稿規定

- ▲投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
- ▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る。
- ▲「川柳塔」への投句は同人に限る。
- ▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事
- ▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。
- ▲書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事
- ▲締切は嚴守されたし。
- ▲投稿其他につき御問答はすべて返信料封入の事。

募 集

第十二卷第十二號課題

十月五日締切

(各題十句以内)

- ▼マスク 關本雅 幽選
- ▼内職 尼綠之 助選

第十三卷第一號課題

十一月五日締切

(各題十句以内)

- ▼紋付 増位汀 柳選
- ▼松の内 麻生霞 乃選

每號募集

- ▼近作柳樽(雜吟) 麻生路 郎選
- ▼各地柳壇(會報)
- ▼文章(評論研究感想吟行漫文)

社 告

社務一切は事務所宛

定 價

- 一 部 金參拾錢
- 半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
- 壹箇年前金(特輯號共)參圓六拾錢

廣 告 料

本誌への廣告に就いては事務所へ直接御一報下さいませすれば御相談に應じます。

▲御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▲誌代受領は送本によつて御承知願ひます▲送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▲御希望により集金郵便を差立てますが御不在中にも預ける様に願ひます▲但集金郵便(二年分)には定價の外に手数料十錢を申し受け願ひます▲御注文には何月號よりと御指示願ひます▲轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▲川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和十年九月廿五日印刷
昭和十年十月一日發行

第十二卷 第十號
(毎月一回一日發行)

禁 無 斷 轉 載

編輯兼發行印刷人 麻生 幸二郎
大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
發行所 川柳雜誌社
大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
電話天下茶屋二五七九番

事務所 (川柳雜誌社)
大阪市天王寺區上汐町一丁目五一番地
電話南六四四番

支社 東京市蒲田區女塚町三三七番
電話大阪七五〇五〇番

賣 捌 店

(大阪) 大賣捌 大寶社書店 明文堂 其他 市内 各書店
(東京) かん 東京堂 かん 巖松堂 やつ 吉岡書店 くら玉森堂 かん 紀伊國屋 かん 三味堂 (神戸) 米田、寶文館 (函館) 石塚 (京都) 三宅 (名古屋) 靜觀堂

(順はろい)

々人の係關社誌雜柳川

賛助員

池澤一雄 居客

伊藤彦造 末弘殿太郎

長谷川弘 大谷五郎

鳥山一歩 大谷三村

岡田平雄 大谷三村

大谷三村 大谷三村

笠原直方 大谷三村

大谷三村 大谷三村

嘉納純生 大谷三村

大谷三村 大谷三村

田中秀二 大谷三村

大谷三村 大谷三村

長崎柳二 大谷三村

大谷三村 大谷三村

長岡半太 大谷三村

大谷三村 大谷三村

國枝晴濱 大谷三村

大谷三村 大谷三村

藤村史郎 大谷三村

大谷三村 大谷三村

藤本卯之助 大谷三村

大谷三村 大谷三村

額原退蔵 大谷三村

大谷三村 大谷三村

赤井清司 大谷三村

大谷三村 大谷三村

淺田清司 大谷三村

大谷三村 大谷三村

道頓堀支部(大阪市)幹事庄

萬よし

九三會支部(大阪市)幹事北山

悟郎

神戸支部(神戸市)幹事首藤

辰修

函館支部(函館市)幹事龜澤

春水

高知支部(高知市)幹事水谷

鮎美

梅田支部(大阪市)幹事米田

まさる

田邊支部(和歌山)幹事辻

左馬

篠川支部(鳥根縣)幹事尼

綠之助

京都支部(京都市)幹事平岩

司郎

鳥取支部(鳥取市)幹事中山

鐵州

堺支部(堺市)幹事八木

美夜路

松山支部(松山市)幹事石丸

晴朗

御旅支部(大阪市)幹事生田

翠夢

天王寺支部(大阪市)幹事須崎

白秋

鶴町支部(大阪市)幹事宮岡

豆腐

御池橋支部(大阪市)幹事西

いわ

松江支部(松江市)幹事田中

都之介

塗青支部(大阪市)幹事植山

九天

大鐵局支部(大阪市)幹事荒井

英賀夫

西條支部(愛媛縣)幹事竹内

機見女

光耀會(大阪市)幹事

生

同

生

食谷南二

喜岡

柴原春二

多春

藤好春

秋

小浪古

美

森東魚

水

人

坊

中

水

立

美

吉

九

岡

太

同

同

前田健

前田健

安田美

安田美

窪田樓

窪田樓

谷脇文

谷脇文

米村孝之

米村孝之

川上三太

川上三太

川上三太

川上三太

龜井辰

龜井辰

岡田三

岡田三

大谷三

丘野遊舟

北山丸

大野八

真田丸

西喜明

青木丸

西喜明

青木丸

西喜明

青木丸

原三

阿形丸

長谷川

江崎丸

石曾

福田丸

岩崎

松鶴丸

森東魚

村松丸

小浪古

中澤丸

藤好春

立澤丸

吉

井上丸

岡

川田丸

食谷南二

某車人

生

生

同

同

首須

福田丸

妹

住田丸

毛

麻生丸

廣

增位丸

東

山田丸

日

西田丸

平

橋本丸

平

橋本丸

清

庄萬丸

芝

關本丸

水

永本丸

三

高山丸

宮

春元丸

主幹

編輯局(同人)

福田丸

住田丸

麻生丸

增位丸

山田丸

西田丸

橋本丸

橋本丸

庄萬丸

關本丸

永本丸

高山丸

春元丸

川柳雜誌案内

大號活字十四字、三行五十五行、一冊増すこ
ごに金十銭、但し前金切手用可、一冊増すこ
改題、紙質、切手案内、柳書廣告、その他

製合本特賣

「川柳雜誌」の合本第二巻
より十卷まで

各巻巻金壹圓五十銭

大阪市内送料壹册六銭

市外送料壹册廿四銭

大阪市天王寺區上沙町一丁目五

川柳雜誌社

懸賞川柳募集

題「菊」 路郎氏選

その他雜吟を募る

用紙官製ハガキ(化粧柳

増と明記の事)

賞品 秀逸數句薄謝を呈す

投稿所 大阪市玉出本通三ノ三六

麻生路郎氏宛

化粧新聞社

川柳きやり

菊判每號七十數頁

毎月一日發行一部廿五銭

東京豊島區高田本町二ノ一

四六八 川柳きやり社

(取次所)川柳雜誌社事務所

紀南柳壇

選者 麻生路郎氏

山 五句

切 九月二十日

大阪市西成區玉出本通

三ノ三六

麻生路郎氏宛

朝報柳壇

選者 増位汀柳

題「指」 切十月十五日

題「雫」 切十月三十日

雜吟は切なし、用紙ハガキ

一丁目 増位汀柳宛

毎日必ず川柳の記事が出てゐる

大阪朝報をお讀み下さい。

(二ヶ月五十銭、半年共六十五銭)

川柳雜誌

投句用箋

本社制規の投句用箋を左の通

りでお頒ち致します、投句に

はなるべく此用箋を御使用下

さい。

五十枚綴 二冊 金拾貳銭

(送料共)

御申込は本社事務所

(切手代用も可)

川柳を作る人愛好する人の必讀誌

川柳俱樂部

一部 廿銭
半年 一圓

毎月一日發行

東京牛込區拂方町一四

川柳俱樂部社

川上三太郎主宰

(毎月一回發行)

川柳研究

一冊 金廿銭
半年 金一圓
一年 金二圓

異色ある本誌の創作欄

と初心者への入門欄を

アナタは絶対に見逃し

てはいけません

見本希望者は二銭切手十枚

同封左記へ

大阪市住吉區住吉町

一六四

會報係 奥野 禿山

(電話南八六七・二三七)

南五花街遊廓事務所

社告

本社句會案内希望の方は左記
へ御申越されれば、其の都度お
知らせ申上ます

大阪市住吉區住吉町
一六四
會報係 奥野 禿山
(電話南八六七・二三七)
南五花街遊廓事務所

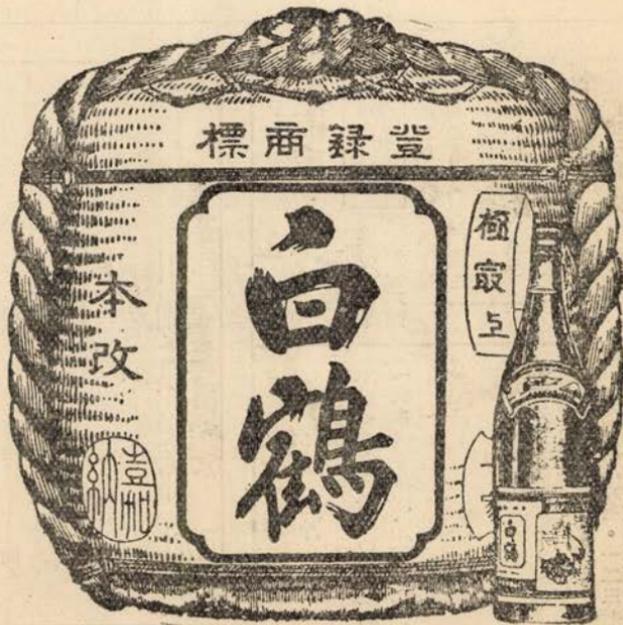
清 酒

句の秋・酒の秋

白鶴が縁とはなりぬ君と僕
 よろこびに添へて白鶴届けとき
 白鶴の方に幹事は極めちまひ
 母親も白鶴ならと一つ受け
 白鶴をいつもさらさらぬくらしむき

攝津灘

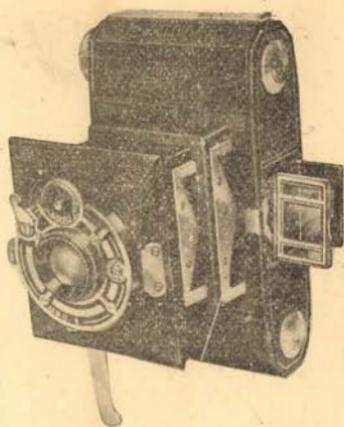
嘉納合名會社釀



手輕るに
寫し易すい

ミノルタ

ヴェスト
カメラ



f8レンズ・アタチメントレンズ付
マーブルシャッター

¥ 19.50



(全國寫眞機店百
貨店ニテ販賣)

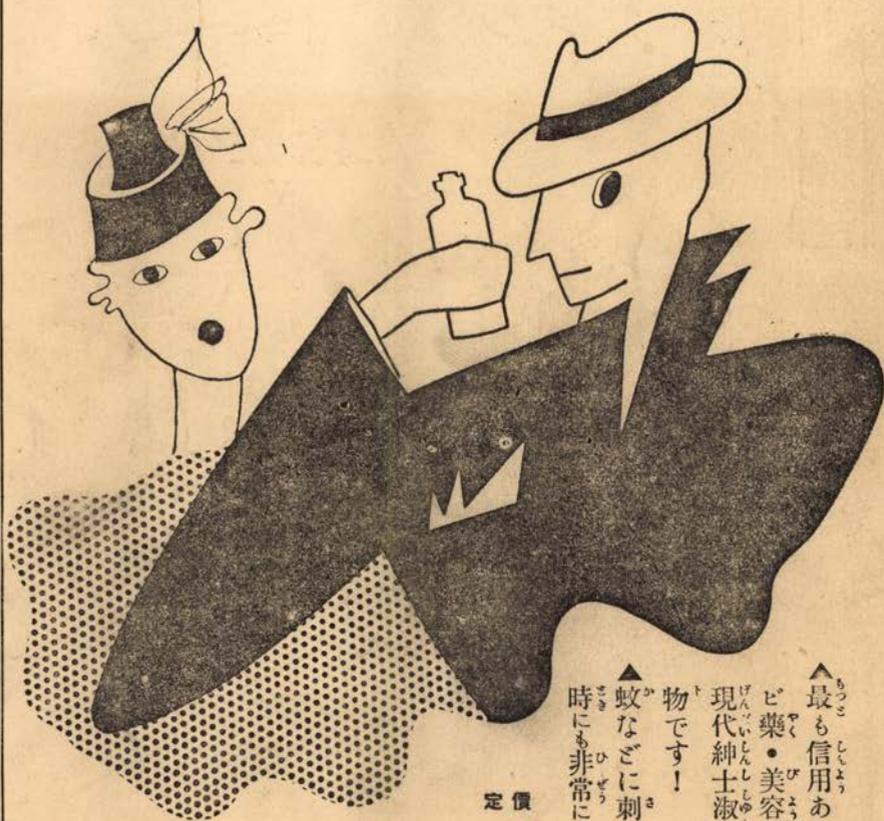
淺沼商會

東京市日本橋室町
大阪市南區順慶町

木顔美びりにきど

うせまりこそを物を出で吹きびきに

うせまりなに麗綺らか地生さ



▲最も信用あるニキ
 ビ薬・美容劑！
 現代紳士淑女の愛
 物です！
 ▲蚊などに刺された
 時にも非常によし！

定價
 .30
 .50
 1.00

館天順谷桃齋 舗本